

●文部科学省●

経済社会の発展を牽引する  
グローバル人材育成支援事業採択

# 行動力ある アジアグローバル人材の育成

事業報告書

[平成27年度]



亜細亜大学  
亜細亜大学短期大学部



亜細亜大学・亜細亜大学短期大学部 学長 栗田 充治



平成 27 年度は、本事業の「拡充期」と捉え、本学が目指す「行動力あるアジアグローバル人材」育成をさらに加速させました。

本事業とともに立ち上がった「多文化インターンシップ」「多文化フィールドスタディー」では、合計 43 名もの学生が、夏季休暇中を利用し、中国、韓国、マレーシア、シンガポール、フィリピン、ベトナム等での活動に参加しました。学生たちは企業で働くビジネスマンからの指導を受け、また現地の学生や地域住民との交流を通じて、人と協働することの難しさや奥深さに気づき、主体的に学ぶ必要性を感じたのではないのでしょうか。

また、今年度は、様々な分野で企業との連携を強化し、学生だけでなく教職員も専門家からアドバイスを受け、ノウハウを学び、その経験を今後の指導・育成に役立てることができるようになってきたと思います。

例えば、2015 年 4 月に本学キャンパスにオープンした ASIA PLAZA において、学生たちが英語などを主体的に学ぶことのできる環境創出のため、専門家とのコンサルティングを開始し、実践的な取り組みとして「東日本第 2 ブロックイベント（英語プレゼンテーション大会）」に挑戦し、学生たちと教職員が一体になって準備を行いました。

留学前・留学中・帰国後の一連つながりの中で成長を測定するツール「グローバル・ビジネスリテラシーアセスメントシステム」においては、留学の成果を最大限引き出すための方策として、企業とともに「Action T.O.」という IT システムを導入し、学生同士で、また教職員からフィードバックを受けることで、各自の目標をより確実に達成することを目指す先駆的な取り組みを行いました。

さらに 1 年生向けにはキャリア指導の専門家とともに基礎的ワークショップを実施し、3 年次生対象には本格的に航空業界での就職を目指す「グローバルエアライン講座」を新たに設置して指導を行いました。就職活動の成果はこれからですが、学生は大変厳しい指導を受け、企業で働くことの厳しさを実感したことと思います。


グローバル事業の最終年度となる平成 28 年度は、これまでに得た成果とさまざまな課題を全て洗い出し、本学の構想の完成形を目指す所存です。

引き続き、多くの関係者からのご指導・ご鞭撻を教授いただければ幸いです。

平成 28 年 3 月 吉日  
学長 栗田 充治

## ●目次●

平成 27 年度 活動報告(時系列)	5
推進本部会活動実績	9
ワーキンググループ活動実績	10
多文化インターンシップ	11
多文化フィールドスタディー	11
多文化フェス 2015	12
学習・活動記録ファイル	13
学習成果記録帳	14
英語および TOEIC®	15
地域言語	15
キャリア支援	16
危機管理セミナー	17
学習支援環境整備	18
留学成果測定/行動習慣化プログラム (ATC)	18
海外留学フェア	19
ホームページ (G 人材専用/多言語サイト等) からの情報発信	20
事務職員研修	21
《海外出張報告》	
多文化インターンシップ	
マレーシア(8月)	24
シンガポール(8月)	24
インド・シンガポール(8月)	25
中国(8月)	26
韓国(8月)	28
韓国(3月)	29
多文化フィールドスタディー	
ベトナム(8月)	30
韓国(8月)	31
フィリピン(9月)	32
AUGP	
インド (2~3月)	35
アジア夢カレッジキャリア開発中国プログラムー	
現地受入関連	38
オリエンテーション及びキャリア指導など	39
キャリア研修等	40
調査指導など	40
インターンシップ受入企業との協議	41
修了式、企業訪問等	42
NAFSA 年次大会出展	
ボストン・ロサンゼルス (5月)	44
職員海外研修	
フィリピン(3月)	46



**平成 27 年度  
活動報告  
(時系列)**

## 前期 4 月

### ■時期・概要（項目）

- グローバル・ビジネスリテラシーシステムを継続利用
- 海外留学フェアの開催
- 就業規則等関連主要規程の翻訳開始
- SNS の継続利用と多言語化ホームページでの情報発信

### ■計画内容

- グローバル・ビジネスリテラシーシステムの継続利用により、各学生の留学成果を明確化する。今年度は、本システムの英語バージョンを利用し、海外協定校留学担当スタッフによる学生指導を開始する。
- 学内の国際交流ラウンジで海外留学フェアを開催し、留学希望者のさらなる増加をはかる。
- 本学就業規則等の主要部分を英語翻訳し、外国人教員の採用活動の際に利用する。
- 前年度までに構築済みの多言語ホームページや SNS による、国内外への情報提供をさらに本格化する。

### ■活動実績

- グローバル・ビジネスアセスメントシステムの継続利用によって、学生が留学の目的を自覚し目標達成に努め、留学生生活を有意義過ごす環境を提供できているが、その中で、特に iPad を活用して日常的にシステムにアクセスした学生ほど、帰国後に、留学の意義や、より良い成果を得たことを自覚できている。また、マニュアル等の英訳により、現地スタッフの理解がより深まり、留学先大学のキャリアセンターとの連携もでき、英語による模擬面接を受けることが可能となった。
- 海外留学フェアでは、特に新入生の海外に対する不安等を払拭し、海外留学への興味を喚起し、希望者の増加につなげることができた。特設ブースでは、留学経験のある先輩学生が、新入生の質問に対応しているため、気楽な雰囲気の中で相談できることが、高い評価につながっている。また今年は期間中に保護者も参加し、留学に関する様々な質問をし、保護者と学生と一緒に留学準備をできるようになった。ゲストスピーカーによる講演では学生の留学意識の向上が図れた。
- 就業規則の英訳が完了し、元々教員採用時に利用していた雇用契約書（日英併記）と合わせて、赴任前オリエンテーションを含む採用活動に活用した。
- SNS の利用による情報発信は、特に新入生に対して、LIVE 感、臨場感を生むよう、グローバルに活躍することに対する、意識向上を図ることができた。また、新入生のみならず、海外で活躍している卒業生等にも注目されるようになった。さらに、多言語ホームページでは、学内外の様々なイベントも含め、広く情報発信しているため、学生におけるグ

ローバル化に対する意識が変化してきている。

## 前期 4～7 月／後期 10～1 月

### ■時期・概要（項目）

- 英語能力測定試験及び地域言語能力試験の実施
- 多言語チューターの活用

### ■計画内容

- 英語以外の地域言語の伸長度を測定するために、各言語の検定試験を実施する。また、最終学年の英語力の伸長度を測定するために 4 年生全員を対象に TOEIC®試験を実施する。
- 英語やその他地域言語のチューターを活用し、学生達に効率的な勉強方法を習得させる。

### ■活動実績

- 英語に関して、入学直後から 4 年次まで定期的に TOEIC®受験の機会を与えることで、学習意欲の維持・向上を可能にしている。また、地域言語の公的検定の受験を義務付け目標を設定したことにより、学生の到達度及び学習内容の認知を促し、勉強意欲を大きく高めることができた。公的検定試験のある中国語、インドネシア語、スペイン語、韓国語で受験が増した。
- 本学部が重視する地域言語（英語以外のアジア系言語：中国語とインドネシア語）のチューターによる語学学習によって、学生たちは過度の緊張感なく、効率よく学習することができた。

## 前期 4～7 月／後期 9～1 月

### ■時期・概要（項目）

- キャリアカウンセラーによる低学年向けキャリア形成基本プログラムの実施、及び高学年向けグローバル・キャリア形成支援プログラム（海外インターンシップ等参加予定学生向け含む）の実施

### ■計画内容

- キャリアカウンセラー等の専門家による、低学年・高学年向けキャリア関連プログラム（マナー研修等含む）を開講する。本講義では、学生が各自で将来の方向性を考えられるように、企業動向等だけではなく、目的意識の重要性等を意識させる。高学年向けプログラムでは、グローバル・キャリアを意識させる内容に特化させる。

### ■活動実績

- 留学での経験を就職活動にうまくつなげることができなかった学生にとって、キャリアカウンセラーが持っている豊富な経験や、民間企業人事採用担当者等から得た膨大な情報は、キャリアを考える上で、大変有益なものとなった。また、ロールモデルを知ることにより、明確なキャリア形成意識を醸成することができた。「グローバルエアライン講座」では、

合計 20 名の学生が、グローバルマインドと併せてビジネスマインドを習得し、エアライン業界のみならず、就職活動に必要な能力を身に付けることができた。また、マナー研修では、具体的なマナーの所作とともに、グローバルに活躍するうえで不可欠な諸々の心構えを示すことで、学生の意識変革が図られ、大変効率的かつ効果的にマナー習得ができた。専門家によるコンサルティングでは、他大学での経験も踏まえたアイデアが提供され、学生にとってより有効的な環境の創出につながった。

### 通年 4～3 月

#### ■時期・概要（項目）

- 学習支援環境の充実化

#### ■計画内容

- グローバル学習支援環境を充実化すべく、国際交流ラウンジを中心に、英語学習、キャリア開発研修、留学・インターンシップ情報提供、留学生交流等の環境を整備する。

#### ■活動実績

- ラーニングコモンズ「ASIA PLAZA」を有効利用するための、東日本第 2 ブロックイベント（英語プレゼンテーション大会）は、学生においてはプレゼンテーションを創りながら、施設利用の新しい方法や考え方を学ぶことができた。また、教職員はその運営方法を習得することにより、新たな学生指導の方法等を見出すことができ、付加価値の高い教育サービスの提供が可能となった。

### 前期 5～6 月

#### ■時期・概要（項目）

- 国際教育交流年次大会（NAFSA）への参加
- 危機管理シミュレーションの実施

#### ■計画内容

- 効果的な協定校の増加を目指すべく、国際教育交流 2015 年度大会（NAFSA）に出展し、参加大学とのネットワーキングを構築し、その後の協定締結を実現する。
- 平成 26 年度前期に完成させた、「海外危機管理マニュアル」を利用し、学内において不測の事態を想定した危機管理シミュレーションを実施することにより、学生及び教職員の危機管理意識の向上も図る。

#### ■活動実績

- 国際教育交流年次大会＝NAFSA に参加し、本学の協定校が少ない地域、とくにヨーロッパの大学と意見交換ができたことにより、本学との協定締結の可能性が高まった。配布物としての英文大学案内のコンパクト版（改訂版）は、来場者にとって大変手軽で利便性が高く、本学の教育内容等を理解・納得させるのに有効で、成果として、ワシントン州の

コミュニティ・カレッジと MOU を締結し、今春学生を派遣することとなった。この締結により、留学費用を比較的安価に押さえ、大学留学と同様の効果を出すことが可能となった。また、米国非営利教育機関との連携により全米のネットワークの活用ができるようになり、学生が効率的に留学先を選択することを可能になった。

- 危機管理においては、国際交流担当部署のみならず、学内関連部署や教員との連携方法を確認することができ、危機発生時において学生・保護者に対し不利益が生じない体制づくりの方法を確認することができた。危機管理ハンドブック及びガイドラインによって、全プログラム共通の対応を示すことができ、危機発生時に、学生、教職員が同じ危機意識のもとで行動がとれるようになった。

### 前期 5～7 月／後期 10～12 月

#### ■時期・概要（項目）

- TOEIC®（学生・職員向け）専門講師（外部）による講座開催

#### ■計画内容

- 学生の英語能力向上をはかるべく、TOEIC® 外部専門講師による課外授業を開講し、本補助事業で目標としている英語能力レベルの達成に向けて課外教育をさらに強化する。また、職員の外国語運用能力向上の観点から、同様に外部講師による授業を開講する。

#### ■活動実績

- 学生の英語能力向上を図るべく TOEIC® 外部専門講師による課外授業（各学年に対応、また 500 点以上を目指す初級クラスから 700 点以上を目指す中級クラスまで目的別に開設）を開講し、本補助事業で目標としている英語能力レベルの達成に向けて課外教育を強化した。また、職員の外国語運用能力向上の観点から、外部講師による英語力強化の為の課外講座を開設、実施した。また、選抜制による交換留学を目指す学生を対象とした TOEFL® 対策講座も開いた。

### 夏季休暇中 8～9 月

#### ■時期・概要（項目）

- 海外授業（インターンシップ、フィールドスタディー）の実施

#### ■計画内容

- 昨年度より開講された海外授業（インターンシップ、フィールドスタディー）の地域、企業数を拡大し、その実施状況を現地にて把握する。

#### ■活動実績

- 多文化インターンシップでは、韓国、中国、香港、シンガポール、マレーシアの 5 つの国・地域で 16 社（韓国 2、中国 2、香港 1、シ

ンガポール6、マレーシア3、アメリカ2)に16名を派遣した。学生たちは海外で働くために必要な能力やビジネスで必要とされる語学力に気づき、帰国後はさらに高い目標感を得ることができた。また、多文化フィールドスタディーは、4ヶ国にそれぞれ、中国4名、韓国11名、フィリピン5名、ベトナム7名の計27名を派遣した。学生たちは現地の大学生等との交流を通じ、共同でプロジェクトを行い、協働することの難しさや楽しさに気づき、主体的に学ぶ姿勢を身に着けることができた。

### 夏季休暇中8～9月／春季休暇中2～3月

#### ■時期・概要(項目)

- 留学先への出張における学生面談指導及び企業視察による研修状況の確認
- 職員対象語学研修
- 協定校視察研修
- 海外でのオムニバス講義の講師依頼・調整のための出張

#### ■計画内容

- 留学プログラム実施国の中から重点校に教職員が赴き、各学生に直接指導を行い、留学中の目標達成管理の進捗状況を把握し、学生のモチベーション維持を図る。サンディエゴ州立大学においては、現地の社会文化やコミュニティの特徴などをテーマに、「多文化社会セミナー」を開催し、現地の事情に精通させたうえで、日系企業を含む在サンディエゴ企業で2日間かけて視察し、各社の事業内容等のレクチャーを受ける「企業視察ツアー」を実施する。
- 事務職員の外国語力向上のため、海外研修を実施する。
- 本学若手職員が協定校を訪問し、現場での教育内容、異文化生活などを視察して高校生やその保護者等への充実した情報提供を行って、より効果的な情宣活動を行う。
- 海外授業のプログラムの一環として、現地日系企業代表者等によるオムニバス講義を実施すべく、意見調整等のために出張する。

#### ■活動実績

- 留学期間中の現地での学生指導は、アセスメントシステムを利用して、留学前に立てた目標の達成状況を把握して行うことができ、残存留学期間を有意義に過ごさせるのに効果があった。ゲストスピーカーによる講演では学生の留学意識の向上が図れた。また、サンディエゴ州立大学での「多文化社会セミナー」での、現地で活躍する日本人も含めた起業家等との意見交換は、海外で働くことの楽しさ、難しさを実感させ、学生に意識変革を起し、留学期間の後半部分をさらに有意義に過ごさせることができた。さらに、アリゾナ州立大学での「企業視察セミナー」では、日本との

関係が深い学生にも身近な企業を訪問し、就職活動の際の有益な情報を得ることができた。

- 中国における企業訪問を通じたオムニバス講義内容の打ち合わせは、学生の留学中の情報収集をより効率的にするだけでなく、人間関係の構築にも役立っている。
- フィリピンで短期語学研修した職員は、語学力の向上のみならず、異文化適応能力も向上させ、今後海外大学との交流にも対応しうる実務的スキルを向上させた。
- 米国ワシントン州への職員派遣は、授業内容や生活環境を知ることにより、AUAP(アメリカ留学)事前研修等において、学生に有益な情報提供を可能としている。
- 新規協定校獲得のための出張により、交換派遣留学を含む多彩な留学プログラムの開発ができ、インドではインターンシップ実施の可能性が高まり、学生の海外実習の環境整備が進んだ。特に在ベンガルール日系企業では、本学の学生の受入れ表明があった。また、チェンナイではマドラス大学との協定締結に向けた具体的なロードマップができた。

### 後期10～11月

#### ■時期・概要(項目)

- 海外授業経験者発表会の開催

#### ■計画内容

- 海外授業を体験した学生に、その内容を纏めさせ、学内だけでなく、他大学の学生と合同で発表会を実施する。また、企業担当者等にも案内し、多方面から意見聴取する。

#### ■活動実績

- 「多文化インターンシップ」「多文化フィールドスタディー」終了後の成果発表会では、企業代表者等の率直な意見を聴くことにより、学生はそれまでの自分からの脱却を図ることができ、就職活動や学習の仕方に良い変化をもたらした。「海外インターンシップ」セミナーでは、他大学から多くの参加者を得て、情報交換・意見交換ができた。

### 後期12月

#### ■時期・概要(項目)

- GGJ EXPOへの参加

#### ■計画内容

- GGJ EXPOに参加し、「経済社会の発展を牽引するグローバル人材の育成支援」採択校として、本学のグローバル教育の特徴を高校生、保護者等に理解促進を促す。

#### ■活動実績

- GGJ EXPO イベントにブース出展したことにより、特に高校生、保護者の意識を高めることができた。同時に、採択各大学との意見交換の機会ともなった。学生たちが他大学



の教職員や企業人の前で、成果を発表することにより、多くの気づきが生まれ、さらに効果的なプレゼンテーションができるようになった。

対し、グローバル人材輩出の重要性を伝えることができた。

## 後期 7～3月

### ■時期・概要（項目）

- グローバル・ビジネスリテラシーデータ収集

### ■計画内容

- 在学中に留学、海外インターンシップ・フィールドスタディー、海外ボランティアなど様々な経験をした学生のグローバル・ビジネスリテラシーの成長度を確認する。

### ■活動実績

- グローバル・ビジネスリテラシーアセスメントデータの収集により、学生たちは留学中の様々な経験を可視化することができ、帰国後の就職活動準備を効率的に進めることができた。また、不足している能力の内容を把握することにより、帰国後の目標設定が以前より容易になった。「アジア夢カレッジ」でのインターンシップについては、受入企業担当者の評価と学生の自己評価を比較することにより、学生は、企業人の考え方を理解でき、企業に必要とされるグローバル人材像を知るとともに、必要な能力を明確にすることができた。データ収集の専門的知識を習得することにより、学生たちは留学期間中に体験した内容等をより深く掘り下げて考えることができ、就職活動の準備の為にデータをより多く蓄積することができた。他方、システムを積極的に活用しない学生の分析、こうした学生への指導の在り方の検討も課題として明らかになった。

## 後期 2～3月

### ■時期・概要（項目）

- 実施状況の精査と年次報告書の作成、国内外への情報発信、多言語ホームページ等の更新作業の実施

### ■計画内容

- 外部からの評価も踏まえ、事業の実施状況を精査し、年次報告書を作成し、本取組の国内外への公表・普及とあわせ、他大学等の成果との比較・検討を行う。

### ■活動実績

- 成果および問題点の明示的な把握が可能となり、次年度計画の策定に有益であった。また、平成 26 年度版年次報告書の配布及び多言語ホームページへのニュースの掲載によって、広く国内外に公開し、有益なフィードバックを得ることができた。本学の取り組み内容の記事掲出により、広く国内に発表することができ、本学学生、企業、高校生、保護者等に

## 推進本部会活動実績

**第8回** (本年度第1回)期日:平成27年4月21日(火)

<議題>

- 平成27年度 東日本第2ブロックイベント「グローバル人材育成フォーラム」の開催について
- 平成26年度事業報告について
- その他

**第10回** 期日:平成28年3月16日(水)

<報告・確認事項>

- 平成28年度予算及びその考え方について
- その他

**第9回** 期日:平成27年9月30日(水)

<議題>

- 10月以降の運営体制について
- 東日本第2ブロックイベント:グローバル人材育成フォーラム(11/21開催)について
- 海外インターンシップセミナー(10/24開催)について
- 多文化フィールドスタディー、多文化インターンシップ報告会(11/1開催)について
- その他

## ワーキンググループ活動実績

**第21回** (本年度第1回)期日:平成27年4月21日(水)

<議題>

- 1.平成27年度 東日本第2ブロックイベント「グローバル人材育成フォーラム」の開催について
- 2.平成26年度事業報告について
- 3.その他

**第22回** 期日:平成27年7月7日(火)

<議題>

- 1.平成27年度 交付申請書について
- 2.平成27年度 東日本第2ブロックイベント「グローバル人材育成フォーラム」の開催について
- 3.平成26年度 事業報告書の進捗状況について
- 4.今後の大学全体としてのグローバル人材育成の方向性について
- 5.その他

**第23回** 期日:平成27年9月29日(火)

<議題>

- 1.10月以降の運営体制について
- 2.東日本第2ブロックイベント:グローバル人材育成フォーラム(11/21開催)について
- 3.海外インターンシップセミナー(10/24開催)について
- 4.多文化フィールドスタディー・多文化インターンシップ報告会(11/3開催)について
- 5.その他

**第24回** 期日:平成27年11月10日(火)

<議題>

- 1.平成28年度予算案について
- 2.東日本第2ブロックイベント:グローバル人材育成フォーラム(11/21開催)について
- 3.GGJ EXPO(12/20開催)について
- 4.その他

**第25回** 期日:平成27年12月22日(火)

<議題>

- 1.平成28年度予算案について
- 2.その他

**第26回** 期日:平成28年1月22日(金)

<議題>

- 1.平成28年度予算案について
- 2.その他

**第27回** 期日:平成28年3月16日(水)

<議題>

- 1.平成28年度予算及びその考え方について
- 2.その他

## 多文化インターンシップ

### ■目的

多文化コミュニケーション学科で習得した「多文化の中で行動する術」を実践しつつ、職業体験を行う実習科目である。事前学習を経て、外国の企業（居住はホームステイ）、または国内の対外部門でおおよそ3週間の体験を行う。最終的には、自己評価レポートと雇用者のレポートで評価する。この実習を含む授業によって将来のグローバル人材としての初歩的経験と知見を大学外の実社会から修得することが主目的の正規授業科目（前期週一回90分の授業と夏季休暇中の就業体験＝2単位）である。

### ■実績

前期15回の授業の中で、履歴書作成、自己分析と自己テーマの深化のための文書作成やプレゼンテーション、実習地の予備調査、実習企業の予備調査、危機管理（海外渡航損害保険業者）、渡航のノウハウの確認、ビジネスマナーの演習（外部専門家）などを行った。夏季実習は、以下の各地で実施した。

シンガポール（シンガポール）6名

マレーシア（ペナン）2名

香港（香港）2名

中国（広東省東莞市）2名

中国（広東省深圳市）3名

中国（上海市）6名

韓国（ソウル特別市）2名

韓国（世宗市）1名

### ■総括

昨年度開講し、今回は2期目の派遣となった。科目設置後間もないため明確な成果は確認でき

ていないものの、以下のような諸点に置いて評価に値する（学生の就業日誌やレポートを参照）。

- (1) 学生は本学および留学先で習得した外国語（英語、中国語、韓国語、一部インドネシア語）を実社会、実務の場面で使用する機会を得た。これにより、自己の外国語運用能力（社会的通用性）を実践（応用）面から評価していた。
- (2) 学生は外国語以外の能力（積極性、自発性、適応力など）の必要性を再認識した。
- (3) 学生はグローバル社会でのキャリア形成に関して、現地でのロールモデルを通して再考察する機会を得た。
- (4) 学生はプレゼンテーション、文書作成などに際して、貴重なコンテンツ（海外での就業体験の成功や失敗など）を蓄積できた。
- (5) 大学および学部は現地企業（日系企業の現地拠点）との連携によって新たな教育の機会を開発した。企業からの評価も概ね良好であった。

キャリア意識が不十分なままで参加して、必ずしも当初のテーマを完遂することができなかった学生もいる。このような学生にはさらなる事前の指導が必要となる。また、企業とより効果的な実施内容（カリキュラム）に関する協議も必要となろう。また、すでに実施している危機回避、危機管理方法の（情勢に対応した）一層の強化も必要である。現在の学生評価手法もさらに改善の余地がある。このような点を課題としつつ、今後も現在の方向を維持、継続しつつグローバル化時代のキャリア教育の方法を確立する。

## 多文化フィールドスタディー

### ■目的

本科目では3年次夏に教員引率のもと海外における様々な異文化現場での調査・研究を通じて、それまでの教科学習で得た知見に加え「アジア行動力人材」を構成する以下の能力の涵養を目指している。その能力とは、①課題を選定する力、②自文化と異文化の差異を見極める力、③様々な失敗を克服する力、④獲得した資料を分析する力、⑤大勢の前で堂々を発表できる力、などであり、主要学習分野を統合する総合科目としての役割が期待されている。

### ■実績

各フィールドスタディーの実施内容は以下の通り。具体的内容については、担当者による出張報告参照のこと。

韓国：共通テーマ「日本と韓国の観光観について」（このほかに個別テーマ）

調査期間：2015年8月10日から16日、調査地：

韓国ソウル市（明洞、弘大、慶熙大学）

参加学生数：14名

中国：共通テーマ「ブランドとしての“東京”の将来像—中国人の考える都市別満足度イメージの比較を通じて」（このほかに個別テーマ）

調査期間：2015年8月6日から29日

調査地：中国北京市（北京師範大ほか）、参加学生数：9名

ベトナム：共通テーマ「観光都市ホーチミン市の特徴」

調査期間：2015年8月18日から26日、調査地：ベトナムホーチミン市

参加学生数：5名

フィリピン：テーマ「フィリピンの社会開発」ほか個人テーマ

調査期間：2015年9月3日から20日、調査地：フィリピンマニラ市、セブ市

参加学生数：5名

2015年に実施された各「多文化フィールドスタディー」の成果は、以下の機会、媒体を通じて公表した。

学園祭における調査報告会の開催(2015年11月3日)

紹介冊子(『国際関係学部アクティブラーニング』)の刊行

大学ホームページ(国際関係学部海外体験型プログラム)での概要紹介

『樞』(国際関係学部フォトジャーナル)第3号での紹介

#### ■総括

(1) 成果; 2014年度に開始された本事業も2015度は2回目を経験した。各調査地での調査経験を通じ、学生の興味関心、実情により即した調査が実施された。一方、2回の調査運営を通じ、

それぞれの課題も明らかとなった。

(2) 今後の方向性; 現状は4地点で開設されているが、参加者は33名と同期の24%に留まっている。学科のカリキュラム体系の仕上げの役割が期待されている以上、さらに多くの学生の参加があつてしかるべきだが、そのためには、①経費、②テーマ、③参加地域(4プログラム中の2つは履修言語(韓国語、中国語)上の制約あり)等を考慮した国内外での多様なフィールドスタディーの開設が望まれる。

(3) 対策; 以上の課題を受け、次のカリキュラムである「平成30年カリ」では、日本国内での異文化体験をテーマとする「多文化フィールドスタディー」の日本版や、AUAP、AUGP等の留学期間中の現地でのフィールド体験の可能性を検討することになっている。

## 多文化フェス 2015

#### ■目的

多文化コミュニケーション学科の開設の理念を学内外に向けて発信するため、昨年第1回目の試みとして大学祭期間に「多文化マーケット」を実施した。これは、学科で学ぶ6地域、朝鮮半島、中国大陸、東南アジア、南アジア、西アジア、ラテンアメリカの文化をその地域のマーケット(市場)を再現することにより、学生たちにグローバル時代の伝統文化のあり方について高い目的意識をもって考えさせるものであった。その成果と課題を踏まえ、今年度は、企画の提案と運営、共同作業、課題発見、問題解決、評価の分析などを通じたアクティブラーニングにより重点を置く試みとして「グローバル時代における多文化的祝祭」を統一テーマとした「多文化フェス 2015」を実施した。

#### ■実績

今年度は、学科企画として大学祭に参加する意義を広く理解させ、積極的な参加を促すため前期中の早い段階で実行委員会を設けた。会議運営については、あくまでも学生主導を原則とする中で教員のかかわりはどうあるべきかについて検討しながら進めた。後期開始とともに3年次の合同ゼミを開催し、多文化フェス 2015の趣旨説明、具体的な展示・説明内容と作業日程、担当者の割り振りなどを確認した。「多文化フェス 2015」の目的は、「グローバル時代における6地域の伝統的な祭りを展示し、グローバル化と伝統が混在する多文化的祝祭(フェスティバル)について来場者に理解を促す」とし、中国:春節、ドラゴンのちぎり絵、韓国:秋夕(チュソク)、先祖霊を迎える屏風と食物、東南アジア:インドネシアのガランガン・クニンガン、神を迎える儀式、南アジア:インドのホーリー祭、色とりどりのカラーボード、中東:姿を持たない神を意識させるミニチュアモスク、中南米:死者の日、祭壇とどくろなどを作成、展示した。また伝統的祝祭は、

各地域独自の曆に基づいており、これを示すため曆の歴史ボードを設置した。さらに来場者の理解を深める場として民族衣装を実際試着できる「いししょうで多文化」、韓国語、ヒンディー語、アラビア語で名前を書いてもらえる「名前で多文化」、などの特設コーナーを設けた。祭りの説明はもちろんであるがこうしたコーナーでも学生の主導的役割を求め、学生の問題意識と学科の理念が来場者に伝わるようにした。

今年度も海外インターンシップ(中国(深圳、東莞、上海)、香港、韓国、シンガポール、マレーシア)やフィールドスタディー(中国、韓国、フィリピン、ベトナム)報告会を同時期に開催することにより、グローバル人材として実践的なコミュニケーション能力を発揮する現場とそのために必要な伝統文化の理解について考えさせた。

#### ■総括

アクティブラーニングに重点を置いた企画として、今年度の「多文化フェス 2015」は、一定の成果をあげることができた。来場者へのアンケート結果では、展示物の充実さのみならず、学生の主体的参加、問題意識の高さ(頑張り)について評価されていた。

一方実行委員の学生たちからは、今後の課題としていくつかの点が指摘された。こうした外部評価に満足せず、冷静に本企画の評価を問う姿勢が学生たちの間から上がったことは今年度の大きな成果といえよう。課題として指摘された点は、担当地域に関する事前調査をより充実させること、学年を超えた協力・交流態勢をより有効な形で整えること、来場者に対して、見るべきポイントをより明確に示すこと、などがあり、次年度は、これらの課題の克服を視野に入れて新たな企画を検討したい。

アクティブラーニングの新たな試みとして本企画は、学生の成長にどんな意味があつたのか。この点に関して、実行委員からは前向きな評価が

得られた。一つのものを完成させるためには互いの協力が必要であることを体験できたことは大きな成果であったという声が多く、種々の課題を順次克服していく過程を皆で共有したことが大きな自信となったと評価したい。また他の地域への関心が高まったとの声もあり、学生たちが、本企画を通じて多文化世界への様々なアプローチの視点を感じ取ったことも大きな成果であった。

「多文化フェス 2015」を通じて学科開設の理念を学内外に発信するための広報活動については、昨年度に課題の一つとして指摘されたが、今年度も継続して「多文化便り」を発行した。さらに学部ブログによる発信を行い、準備段階から反省会まで必要に応じて状況を公開した。その効果もあり、外部からの来場者も昨年度より増え、その中から武蔵野市国際交流協会 (MIA) との共催企画「多文化ミュージアム」が平成 28 年 2 月 15 日から 17 日の 3 日間、武蔵野プレイスのギャラリーにて実現した。この企画は、MIA と学生実行委員の手によって運営され、MIA の活動紹介とともに学科は、多文化フェス 2015 で使用した中国、韓国の展示物をメインに据え、海外フィールドスタディーをパネルで紹介する展示を行い、また「名前が多文化」のイベントも実施した。こうした地域における多文化交流の在り方を学生

たちが考える契機となったことも今年度の企画の成果として指摘しておきたい。

武蔵野市国際交流協会 (MIA) との共催企画「多文化ミュージアム」チラシ

## 学習・活動記録ファイル

### ■目的

国際関係学科の「自己記入型」学習記録ファイルの作成と配布の目的は、学生が学習 (科目履修) や社会活動参加を計画し、また、その結果や過程を振り返り、次段階の課題を設定するプロセスを明確に意識し、自己目標を達成することを支援することである。

### ■実績

国際関係学科の初年次学生 (新入生) に対して自己記入型のファイルを配布する。

4 年間の大きな目標、および半期 (セメスター) ごとの個別目標を意識させ、かつ学習履歴や成績、資格取得などを記載させることによって学習や人間形成などの観点から目標達成度を明確に意識させている。

記載項目は、セメスターの大きな目標、GPA (全科目成績を平均化して算出した数量指標)、執筆したレポート、TOEIC®の点数 (折れ線グラフの方眼用紙提供)、各種資格の受験状況と合否、読書記録などである。また、穴あけファイル形式なので、返却されたレポートや資格証明などをファイリングすることも可能である。記載状況を必修ゼミの教員がセメスターにつき 2 回チェックし (教員のサイン記入または捺印)、活用を促進している。これは上級学年になっても継続的に活用することが可能となっている。また第三学年の専門ゼミ所属選抜の際には、学生の学習履歴の

記録として参照される。以上のように学生自身、教員ともに活用する機会がある。

### ■総括

一年間使用した学生に対するアンケートによれば、概ね好意的に捉えられている。従来とすれば無目標、無計画で漠然と大学生活を過ごす傾向があった我が国の一部の大学生に対し、一定の効果はあったものと判断できる。また、GPA 概念の存在や TOEIC®スコア (の向上) を明確に意識させることはできるようになったと言える。

しかし、当初期待した効果目標を十分に達成するためには、多くの課題が残る。まず、このファイルに記載することのメリットを学生に伝えきれていない。したがって記載することへのモチベーションが低くなりがちである。また、使用するプロセスで要記載項目の設定や形式に不適切な箇所があることも指摘されている。さらに全体的なファイルのサイズ、形式は、「取り扱いの容易さ」の点で改善が必要である。

デジタル化あるいはオンライン化されたバーチャル空間 (持ち運びの必要がない) で同様の自己記入ファイルを保持、作成することもできる現状との兼ね合いも検討課題となろう。最後に、教員の関与、助言、指導方法において、どのような形態が望ましいのが、議論する必要がある。

学生に大学生活や学習に対する目標を設定させ、その結果をレビューさせ、それを踏まえた次

の課題を明確化させ、効果的な目標達成を支援するためにはこのような「自己記入型」ノートは有効である。バーチャル空間での保管よりも常時携帯し、容易に参照できる（学生自身も、指導教員も、場合によっては就職活動の際の採用企業側の担当者も）現在の形式の優位性も認識しつつ、次

年度は上記の課題を克服する利用方法を工夫することが不可欠である。

また、厳密な効果の計測は不可能であっても、引き続き教員や学生の意見を吸収しつつ改善の努力を重ねる必要がある。

## 学習成果記録帳

### ■目的

多文化コミュニケーション学科では、学生に対して「卒業までに海外体験を」をスローガンにアメリカやアジア各地への語学、及び現地体験型学習（フィールドワーク）やインターンシップへの積極的参加を奨励している。こうした海外体験、またそれにつながる国内における日頃の学習及び活動の内容と成果を記録することの重要性は言うまでもない。本記録帳は、学生たちが学科開設の理念を常に意識し、グローバル世界でその実践的コミュニケーション能力を発揮できる人材として将来設計をより具体的なものとするために活用されている。

### ■実績

学習成果記録帳は、導入時から現在までその体裁をパスポート型とし、また通称を「多文化パスポート」としている。

今年度も新入生全員に1回目のオリエンテーションゼミで配布し、記録帳を携帯する意味についてこれまで通り以下の3点に絞って説明した。

(1) 国境を越えて学習・活動の場を見出すグローバル人材（多文化人）を養成する学科のシンボルとして携帯することにより、大学内での自己のアイデンティティを確立する。(2) 学習・活動成果を記録することにより、大学生活における自己の目標と達成度を確認し、客観的視点から自己評価を行なうとともに次の学習・活動課題に対する問題意識を高める。(3) 就職活動をする際に、この記録を元にして大学生活をまとめ、履歴書作成や自己アピールなどで有効利用できるようにする。

学生は、教員の指導に基づき定期的に、または自らの申告に基づき適宜、語学留学、TOEIC®のスコアや地域言語（学科に開設されているアジア及び中南米諸言語）の到達目標や成果、また国内外のフィールドワークやインターンシップ、ボランティア活動、その他学科が必要と認めた学習及び活動成果に対してシールを貼るにより記録する。

シールは主に言語・現地体験型学習系

(TOEIC®や英検、地域言語、留学、海外フィールドワークやインターンシップ、等の成果を示すもの)と活動系(学内外の多文化やグローバル活動等の成果を示すもの)と授業系(授業内で扱う多文化、グローバル人材、将来設計学習等の成果を示すもの)に大別されるが、内容とレベルに応じて得点を定めている。通常、言語・現地体験型

学習系と活動系は授業系のものよりも高い得点とし、学生の言語学習、留学、国内外での活動への積極的な関わりを促すことを目指している。

学生の学習・活動の場が広がるにつれて、必要に応じ、学科会議において新たなシールの作成の必要性について、また評価対象としての是非について検討している。今年度は、海外ゼミ合宿参加や学内長期ボランティア活動などを評価の対象とすることが認められた。

今年度はシールに基づき4年間の得点を集計し、第1期生の卒業式の中で多文化アクティブ大賞として、3部門別（大賞：シールの総得点数、上位3名、フットワーク賞：シールの総枚数、上位1名、プロジェクト賞：現地体験型学習・活動のシール総枚数、上位1名）に表彰をおこなった。

また3年次生を対象に前期期間中に一度得点を集計し、中間発表として高得点者と上記3部門別の具体的な成果内容を公表し、卒業時までさらに充実した学習・活動成果を目指して努力するよう促した。

### ■総括

卒業時の表彰制度について学生たちに周知したことは、記録帳の有効活用の必要性について考えさせる上で大きな意味があったと考えられる。3部門別の内訳は、大賞が、99点、90点、80点の3名、フットワーク賞が、43枚で1名、プロジェクト賞が、6枚で1名であった。この第1期生の成果を一つの基準として次年度はこれを上回る成果が出るようさらなる有効活用について学生たちに働きかけていきたい。また今年度前期に行った3年次生を対象とした3部門に関する中間集計結果の発表が次年度どのような効果をもたらすのか注意をしてみたい。

これまで様々な機会に学科のシンボルとしての記録帳の役割について学内外に発信してきたため、学科学生にとって記録帳は、より身近なものとなったといえる。一方、この記録帳を積極的に活用しようとする学生とそうではない学生の意識の差について指摘されるようになった。次年度の課題としてはこうした関心の薄い学生に対する対応策について検討すること、その一環としてこれまで4年間に発行した言語・現地体験型学習系、活動系、授業系に大別されるシールを形体、得点別に整理し、学生に評価対象となる学習・活動について分かり易く解説した案内の作成が必要といえる。何が評価の対象となるのかを1年次からきちんと理解させることによって、学科開設

の理念と将来のキャリア設計について意識させることが求められる。また2年次に実施される選択性のアメリカ留学には約8割の学生が参加し

ているが、帰国後の早い段階で留学時の学習・活動成果を把握し、シールとして記録し、3年次へつなげることが重要である。

## 英語および TOEIC®

### ■目的

(1) 主に1年生を対象として、上級学生による英語チュータリングを実施し、基礎的な英語文法力の向上を目指し、あわせて上級学生の指導力育成を図った。

(2) 2年生を対象とする課外講座では、アメリカ留学前(国際関係学科)と留学後(多文化コミュニケーション学科)に、いわゆるシャドーイング方式を主眼とすることで、リスニングおよびスピーキング能力強化を軸としつつ、TOEIC®得点を向上させることを目指した。

(3) おおむね海外留学を体験して帰国した学生(3年生)を対象として、週一回の英語課外講座を開催し、英語力全般の維持とあわせて、TOEIC®得点の向上を目指す。

### ■実績

(1) チュータリングでは、前期51名を9クラス、後期25名を8クラスという編成で少人数での指導を行った。内容はTOEIC®対策用のテキストを用いて、文法力の強化を図るとともに、受講学生の希望が多かったため、聴解問題も取り入れ、より実践的な指導を行った。

(2) 留学前後のクラスでは、前期中週一回2時間のクラスを2つ、夏季集中(アリゾナ州立大学およびサンディエゴ州立大学派遣予定者向け)クラスを1つ、後期帰国者向けクラスを1つ設置し、合計27名の参加があった。前年よりも参加者が減少したものの、アンケートによれば、参加者の7割以上が英語力の向上を実感している。

(3) 外部機関(ベルリッツ)との提携により、前期中、通常クラス3つと、上級クラス

(TOEIC®600点以上取得者対象)1つ、合計4クラス48名参加、後期中、通常クラスのみ4つ、

合計40名参加の講座(一回90分、半期15回、合計30回)を実施した。前期終了時のアンケート(回収率83%)では、講座により、「英語力がかかなり向上」「ある程度向上」と述べた者が78%に達した。なお、講座受講者を含む3年生全般のTOEIC®ベストスコア平均値は、2014年度末から2015年度末にかけて、国際関係学科について23点(516点⇒539点)、多文化コミュニケーション学科について12点(545点⇒557点)の増加であり、不十分ながらも、いくらか伸ばした。

### ■総括

チュータリングについては、少人数での指導が可能であったため、受講生にとっては各自のペースとレベルに合わせて学習を進めることができ、本年度も受講生には概ね好評であった。ただ受講者自身の学習態度に強い影響を与えるまでには至らなかったようで、補習以外に自学自習の習慣をつけさせる方法を工夫する必要があると考えられる。

課外講座については、昨年度より受講者が減少傾向にあった。これを打開するために、今年度は一部クラスを通常授業時間帯(5時限目)に移すなどの措置を取ったが十分な成果は出なかった。また、多くの学生が、カリキュラム上要請されている600点を取得した時点で、それ以上の学習へのモチベーションを失うという側面もある。総じて平成28年1月末現在で、国際関係学部4年生のうち、11.8%がTOEIC®700点以上取得、42.4%が600点以上を取得、70.6%が500点以上を取得した。1-2年次でのTOEIC®得点の飛躍的な伸びと3-4年次での停滞というギャップをどう克服するか、次年度の大きな課題である。

## 地域言語

### ■目的

多文化コミュニケーション学科において地域言語は、英語と並ぶカリキュラム体系上のコアとして位置付けられている。英語については在学中5回のTOEIC®受験の義務化のように、学科開始時には既に学習成果の経年観察を可能とするシステムが整備されていた。他方で、地域言語は、1年次に初級を週3コマ受講したのち、7-8割の学生は2年次アメリカに留学し、その後1年間のブランクを経て3年次になって中級として地域言語の学習を再開するなど、語学学习上、英語以上に指導上の難しさを抱えている。このため学科開設以来、学生の学習に対するモチベーション

を維持・向上させる工夫が求められていた。この課題に対処するため、平成27年度も検定制度が整備されている4言語については、留学生の活用、検定試験の受験料補助等の対応を行った。

### ■実績

#### 1. チューター

昨年度に続きインドネシア語の授業では留学生をチューターとした支援を実施した。中級の授業では、前期6回、後期6回の合計12回、インドネシア人留学生2人にチューターとして参加してもらい、前期は主に日本人学生のインドネシア語会話の練習相手、後期は日本人学生の書いたインドネシア語作文を修正、適切な



文章で表現するためのアドバイザーとなってもらった。また、留学生には必要に応じてインドネシアの社会や文化について日本人学生に語ってもらい、高校生を迎えてのインドネシア語授業でも彼らに中心的な役割を果たしてもらおう等、授業を盛り上げる役割を担ってもらった。

## 2. 検定料補助（言語別）

### （1）実施内容

・韓国語（韓国語能力試験）（2015年10月実施）

受験者 27名（内訳 上級（6、5級）2名、中級（4、3級）6名、初級（2、1級）19名）

合格者 22名（内訳 6級1名、5級1名、4級2名、3級1名、2級9名、1級8名）

・中国語（中国語検定）（2015年（6、11月）、2016年3月実施）

受験者 11名（内訳 3級11名）

合格者 6名（内訳 3級6名）

・インドネシア語（2015年7月、2016年1月実施）

受験者 23名（自費受験者を含めると26名）

（A級2名、B級2名、C級9名、D級8名、E級2名）（自費受験者C級1名、D級2名）

合格者 8名（含む自費受験）

（B級1名、D級2名、E級2名）（自費受験者C級1名、D級2名）

・スペイン語（スペイン語検定）（2015年11月実施）

受験者 15名（4級5名、5級8名、6級2名）

合格者 10名（4級2名、5級6名、6級2名）

（2）実績（2015年度到達目標級以上の級の合格者）

韓国語4名、中国語6名、インドネシア語1名、スペイン語2名

※到達度目標：韓国語（韓国語能力試験3級）、中国語（中国語検定3級（但し、「アジア夢カレッジ」2級）、インドネシア語（インドネシア語検定B級）、スペイン語（スペイン語検定4級）

## ■総括

（1）成果；合格者は平成26年度同様13名であったが、中国語が8名から6名に減少した一方、韓国語は3名が4名（うち2名は到達目標以上の6、5級合格）、インドネシア語については初の合格者が誕生した（スペイン語は同数の2名）。これは検定補助対象となった4言語すべてで到達目標級に至る教育支援が可能となったことを意味する。また韓国語のように地域言語の基礎の上にAUEPに参加し、当該言語の最高級を取得する学生が出たことは、今後の地域言語教育の方向性を示すものと言えよう。今年度、計画書に掲げた目標到達率30%で計算した目標人数33名（定員110名）中13名を地域言語が貢献し、3年次生（平成26年度末時点）の英語におけるTOEIC®700点以上の到達者23名に地域言語13名を加えると、多文化コミュニケーション学科では36名の到達者を出したことになる。在籍者139名のうちの26%と、「英語+地域言語」を特徴とする多文化コミュニケーション学科の語学教育の成果が表れた結果となった。

### （2）今後の方向性

今年の韓国語のデータが示しているように、地域言語に加え多文化フィールドスタディー・インターンシップ、AUEPなど各種アクティブラーニングが整備されている言語については、外国語学部で当該言語を専攻する学生と同等かそれ以上の成果を収めることが可能であることが証明された。今後はすべての言語において、各言語に条件に合せ可能な限りこうした支援の仕組みを整備して行くことが求められよう。

## キャリア支援

### ■目的

グローバル人材育成において不可欠なキャリア教育推進のために、昨年度に引き続き、専門家（キャリアカウンセラー）の支援を受けて、まず、低学年向けには、入学直後からのキャリア形成の考え方を指導し、将来の海外体験・就業活動への姿勢を養う。また海外留学経験者（3年生）向けには、「グローバルエアライン講座」を実施し、エアライン領域をはじめとする国内外グローバル企業の事業内容、求められる人材について指導し、あわせて実務的な能力育成をはかる。

### ■実績

1年生向けの課外講座として「アクティブ・キャリア入門講座」を合計7回開催した（5/12、6/9、7/14、10/13、11/10、12/8、1/12）。講座には、28名（うちグローバル人材育成入試入学者6名）が参加した。キャリアカウンセラー指導の

もと、講座では、異文化理解ゲーム、ビジネス体験シミュレーションゲーム、新聞ワークなどを実施し、学生のコミュニケーション能力、指導力育成を図った。また代表学生2名を「国際女性ビジネス会議」に派遣し、グローバルに活躍する人々との交流体験をもたせた。さらに12月19日には外部社会人10名を招き、交流イベントを実施した。

3年生（女子学生）を対象とする「エアライン講座」については前期中に説明会を複数回開催し、書類選考と面接を経て、最終的に2クラス（火曜及び木曜）計20名の受講者を選抜した。準備セミナー（7/21）を経て、10月に4回、11月に3回、12月に2回の通常講座を実施した。さらに1月24日、2月28日、3月27日（いずれも日曜日）には、一日セミナーを行った。これらのセミナーにおいて、グローバル競争の中での企業、

とくにエアライン関連企業の現状、そこで必要とされる能力、またコミュニケーション力全般の育成を図った。その後、任意ベースで、直接的な就業カウンセリングを、現在（4年次）においても継続している。

#### ■総括

1年生向け「アクティブ・キャリア入門講座」の参加学生の間では、自主的に「新聞ワーク」を継続する者、入学者向けオリエンテーションでの指導補助学生となる者など積極的に学生生活を送ろうとする傾向が顕著に見られた。一方で、課外講座という位置づけのため、次第に出席者数が減って行ったという事実も否定できない。とくに正課課題と講座参加の両立が困難になったという面もある。これを解決する一助として次年度では、国際関係学部専門科目として、「アクティブ・キャリア入門」を開設することとした。

「グローバルエアライン講座」では、毎週一回3時間というハードな内容にもかかわらず、学生たちが継続的に参加し、そのなかでコミュニケー

ション力やマナーなどを飛躍的に向上させた。そのことは講座終了後も自発的に学習グループを形成し、関連勉強会を継続しているという点からも明らかである。一方、講座の内容がある程度エアライン分野に重点をおくため、ほかのグローバルビジネス分野への関心が高い学生にとっては、やや重荷になるという側面もあった。次年度もこの講座を継続する予定であるが、そのさいにはエアライン分野への就業意欲の高さを第一の基準として選考を行うこととしたい。

「アクティブ・キャリア入門講座」についても、また「グローバルエアライン講座」についても、直接的な参加者は20名前後であるが、同世代の学生がグローバルなキャリア意識をもって活動していることが一般の学生にとって大きな刺激となり、大学全体でのグローバル人材育成につながるものと思える。今後も、このような、グローバル人材のいわば中心となる牽引役の学生の育成を継続して行きたい。

## 危機管理セミナー

#### ■目的

現在、世界各国で重大事件、事故、災害等が発生していることを受け、リスクマネジメントの再検討に向けて、本学留学プログラム等で発生した実際の事例を踏まえ、意見交換等を行う。また、学内の危機管理対応体制の現況を認識し、より良い体制構築のための情報交換を行う。

#### ■実績

開催日：平成28年2月9日（火）15:00～16:30 525 教室

講師：損保ジャパン日本興亜リスクマネジメント株式会社 ERM 事業部 竹腰 宏 氏

出席者：副学長、国際関係学部11名、アジア研究所1名、事務職員8名（計21名）

内容：

①本セミナー趣旨説明（本事業構想責任者 栗原孝 教授）

②渡航先のリスクを知る ～海外安全・危機管理の重要性～（講師）

危機管理とは？、なぜ海外危機対応が難しいか（日本と異なるリスクレベル・国/地域によって異なるリスク等）、普段からの備え（危機管理体制の構築、情報伝達の重要性）、まずは予防（研修・訓練の重要性）

③情報共有/意見交換

④全体講評（本事業チーフディレクター 新井敬夫 教授）

#### ■総括

①昨年度は危機管理対応マニュアルの整備により学園関係者がそれぞれの役割を認識することができ、今後のプログラム運営に携わる教職員が学生を引率し、現地で研修を行う際にも同等の基

準で対応することが可能となった。また、ガイドラインは海外安全に関する基本的な心構え、具体的な安全対策、緊急時の対処方法をまとめたものであり、学生の知識及び意識を向上できるものとなった。

②昨年度はシミュレーションも実施したが、実際は情報の伝達や収集方向、大学としての意思決定プロセス、社会・メディアに発信する準備などにおいて多くの課題が露呈した。今回のセミナーで改めて明らかになったことは、課題を克服するためには、絶え間ない準備と訓練が欠かせない。「マニュアルがあっても自転車には乗れない！」という講師の言葉が印象的であった。危機管理の手引きに書かれた内容は、身につけていなければ有事の際の対応は難しいということだ。

③詳細ポイント：

・テロ発生時、とにかく安否確認、様子を見ること（2～3日で収束する場合は多いのでむやみに動かない）

・情報収集は、現地からとる（大使館、協定校、JICA など）ホームページはタイムラグがある

・学生とは SNS を含め通信手段の確保、保護者対応は、「担当者」でなく、「適任者」が行う（誠意、うそをつかない、やれることは全てやる）

・広報は、マスコミ対応の準備

国際関係学部中心ではあったが、改めて危機管理について意識刷新を図ることができた。マニュアルを作っただけ、シミュレーションを行っただけでは的確な対応はできない。継続することの重要性を痛感した。

次年度は、全学的な取り組みとして実施すべきと考える。

## 学習支援環境整備

### ■目的

(1) 2015年4月にオープンした ASIA PLAZA (ラーニングコモンズ) で、英語を中心とした語学やキャリアに関して学生たちが主体的に学ぶことのできる環境創出のため、専門家とのコンサルティングを開始した。

(2) 具体的には、本事業東日本第二ブロックイベントとして開催される学生による英語プレゼンテーション大会を好機ととらえ、学生に対して、その大会本選出場を目標として自らの発信力を伸ばす取組みを行った。

### ■実績

ラーニングコモンズ等の学内学習環境を活用し、英語プレゼンテーション大会への準備を以下のプロセスで遂行した。

対象：全学の学生（ゼミ単位、サークル単位、授業クラス単位、その他を想定）

方法：全学メールで募集案内を行う

応募チーム：国際関係学部7チーム（1年2チーム、3年3チーム、4年1チーム）及び経営学部（3年）1チーム

一次選考（書類）：学部内の書類審査を通じて、3チームに絞る。

練習プロセス：夏期休暇前に3チームに連絡し、10月に予選を行うことを伝達する。これ以降、外部アドバイザーとして(株)丸善の指導が入る。また、英語表現に関しては、本学英語教育センターのネイティブ教員による指導を行う。

発表機会：9月下旬オープンキャンパスで高校生を対象に予行練習を兼ねて発表を行う。

学内予選：10月上旬学内最終予選の結果、1チームが選ばれる（国際3年生チームが選出）。

大学間予選：選抜された1チームに対して、さらに強化指導を行う。ビデオ撮影を行い、オンラインでの予選参加となる。予選敗退。

### ■総括

英語プレゼンテーション大会では惜しくも本選出場を逃したが、複数の学生チームがエントリーし、真剣にそれぞれのテーマを探求し、英語で自らの主張を発表するを経験した。学生は、その難しさと醍醐味を実感したようだ。

専門家によるコンサルティングでは、他大学での経験も踏まえた助言やアイディアが提供され、学生の提案内容がコンテストのテーマに合致しているか、主張に対して論拠が説得に足るのか、提案のフォーカスした問題提起（問い）が聴衆の興味関心が高いか、独自性がある提案（答え）となっているかなど、コンテンツのクオリティが上がるよう助言があった。

また、英語教育センターネイティブ教員からは、英語の発音、英語でのコミュニケーションに必要な body language などについて指導があった。マンツーマンで受けることで学生の理解度や意識向上につながった。

個々の学生にとって刺激となっただけでなく、教員にとっても今後の授業や指導に行かせる内容であった。ただし、予選敗退の結果を受ければ、まだまだ改善の余地はあり、次年度に向けて反省点を洗い出し、それを克服する取組みを行うべきと考える。

## 留学成果測定/行動習慣化プログラム (ATC)

### ■目的

平成26年度に引き続き、株式会社ディスコと共同で開発したグローバル・ビジネスリテラシーアセスメントシステムに基づく留学成果シートを活用し、留学前後の成長を可視化する取り組みを行った。同システムは、「リーダーシップ」「コミュニケーション能力」「問題解決力」「言語適応力」「環境適応力」社会で必要とされる5つの能力を測定の指標とし、留学前後の行動特性の変化や気づき・学びを引き出す仕組みである。

平成27年度は、留学の成果を最大限引き出すための方策として、新たに株式会社ネットマンと連携し、Action T.C.というITシステムを導入した。本システムは、目標達成のための行動習慣化メソッドを取り入れており、具体的には「PDCFSAサイクル」を回すことで、すなわち「P：目標設定→D：行動習慣→C：内省→F：吸収→A：行動改善」というサイクルで、特にF：吸収＝他者からのフィードバック受けることで、より確実に目

標達成することを目指すツールとなっている。

（詳細は <http://www.netman.co.jp/pdcfa/>参照）

上記にシステムにグローバル・ビジネスリテラシーアセスメントシステムを連動させることで、5つの能力のさらなる伸長を図ることを狙いとしている。

### ■実績

平成27年度は、アメリカプログラム(AUAP)、グローバルプログラム(AUGP)、交換・派遣留學生制度(AUEP)、アジア夢カレッジキャリア開発プログラム(AUCP)に参加した学生を対象に下記の取り組みを行った。内訳は次のとおり。

AUAP 11チーム、55名(+アドバイザー6名)  
AUGP(夏季) 16チーム、80名(+アドバイザー5名)  
AUEP 3チーム、13名(+アドバイザー4名)  
AUCP 2チーム、11名(+アドバイザー5名)  
AUGP(春季) 12チーム、60名(+アドバイザー10名)

【留学前】留学プログラム横断的に出発前の事前研修会を実施し、その中で前年度に講習を受け資格を得た PDCFA インストラクターによる Action T.C. システムの目的及び運用方法、さらに「PDCFA (Fは Feedback) サイクル」のコンセプト等についてレクチャーを行った。次に学生は正しい行動目標の設定方法について学び、実際にその場で留学目標を立てるとともに目標を達成するための行動習慣を同時に設定し、自らその結果を振り返るスキルを学んだ。さらにグループ分けをすることで、メンバー同士が自らの目標や行動習慣を共有し、お互いにフィードバックを授受する方策を学習した。

【留学中】プログラム毎に派遣された学生たちは、日々留学生活を送りながら、目標達成に取組み、グループ内で自らの振り返りと目標達成状況のチェック・フィードバックを行った。学生だけでなく、特定の教職員及び先輩が彼らのアドバイザーとして、オンラインで支援を行うことでさらなる効果の拡大を図った。

【留学後】帰国後オリエンテーションでは、Action T.C. を活用した学生一人ひとりの取組みの結果を「成長の軌跡」(同 IT システムにより記録をプリントアウトすることが可能)として配布し、目標が達成できたかどうか、できたとしたら何を学び身につけたか、また達成できなかったとしたら何が課題なのか等、その結果からの気づきを深化させるワークショップを行った。

また、キャリアセンターと連携し、振り返った留学での学びをその後の就職活動に生かすための研修を行った。

#### ■総括

今回、学生のモチベーションを上げるべく、上記取組みはチーム対抗及び個人ランキング制を導入した。毎日の生活の中で目標に取り組み、毎週振り返りを行い、他者から多くのフィードバックを受けた積極的な学生が多数おり、目標達成に本システムが有効だったことを証明した。

しかしながら、当然のことであるが、チームの雰囲気によって、そして個性によって取り組む姿

勢/真剣度には温度差があり、ほとんど取り組まず、オンライン・アクセスもしない意欲が低い学生も見受けられた。自覚して学び、生活する、その記録を残すことの意味を十分理解させる、活用するように声掛けする、などの工夫をしなくてはならないことがあきらかになった。(留学先によっては、インターネット環境が整備されておらずアクセスが困難または不可能だった学生もいた。)

自己評価という問題も指摘されているが、その中でインターンシップ先の協力を得て、他者評価をしていただく工夫をした場合、実施度は 100% であり、記録もしっかりできるという結果を得た。自己を見る目が変わることにより、自己評価が下がることもある。また、学生のリテラシーはバランスが取れるわけではなく、いびつなグラフを示すことが多々ある。こうした場合にどのように自覚を持たせ、また自信をもてるように毎日を過ごさせるかを考えなくてはならない。

一方で、教職員アドバイザーにとっても、日常業務の中でコミットする度合いは千差万別だった。このシステムを継続するにあたっては運用上の課題があることが浮き彫りになった。そのサポートのあり方が、結果として学生の積極的/消極的な活動として現れたとも言える。

学生アドバイザーの活躍は目覚しく、彼らの存在によって目標達成の取組みを継続できた留学生も多かったと考える。また、後輩に対するサポートを行う過程で先輩学生自らも成長を感じたというコメントもあった。

大量の学生に特段の手も加えないで実施した場合でも、留学によるリテラシーの伸びがみられたが、さらに、工夫を加えることにより、効果は高まると考えられる。類似したシステムの開発に取り組む大学が増えているとの情報もあるが、アセスメントの対象である異文化理解、社会人基礎力についての学生の理解と自覚が不可欠であることは共通しているようだ。

次年度に向けては、その運用の方法、または導入の是非を検討することになると思われる。

## 海外留学フェア

#### ■目的

新入生と在生学生に対し、本学の留学プログラムを紹介し留学参加者の増加を図るため、平成 27 年 4 月 10 日から 5 月 15 日の期間に海外留学フェアを開催した。

#### ■実績

(1) 留学促進グッズの作成  
留学参加者の増加や国際交流会館ラウンジの利用率増加を図るため、以下のグッズ等を作成し、留学説明会に参加した学生等に配布した。

◎留学促進グッズ：クリアファイル、タッチペンバンド、定規付簡易パンチ、5色ふせん紙、

◎国際交流会館ラウンジ及び学内に設置：留学促進パネル、ラウンジテーブル用三角 POP、のぼり、ラウンジステージ幕、バナー

#### (2) 留学説明会の実施

亜細亜大学の留学制度であるアメリカプログラム (AUAP)、グローバルプログラム (AUGP)、交換・派遣留学生制度 (AUEP) や提携する外部機関の説明会を行った。AUAP では、4 月 10 日から 5 月 15 日まで「AUAP Friday」と題して毎週金曜日の昼休みに 5 回に亘って AUAP の留学イベントを開催した。留学先の一つであるサンディエゴ州立大学からゲストスピーカーを招いての講演や経験者による授業・留学生活について

のプレゼンテーション等を行い、合計 227 名の学生が参加した。AUGP では、イギリス、オーストラリア、韓国、中国、マレーシア等留学先別の説明会や留学経験者によるプレゼンテーション等を 10 回行い、合計 232 名の学生が参加した。その他実施した交換留学、海外インターンシップ、海外ボランティアプログラム等の説明会を合わせて、留学フェア期間中に 557 名（前年度比－9 名）の学生が参加した。

### （3）留学相談ブースの設置

国際交流会館ラウンジ内に留学相談ブースを設置し、留学先に関する情報・資料の展示や留学経験者による留学相談の受付の場とした。

#### ■総括

##### <成果>

今度のフェア全体の参加者数は 557 名（前年度比－9 名）と昨年度並みの参加率を保っており、

AUAP、AUGP でも、ほぼ前年度並みの留学参加者を集めることができた。

##### <課題>

留学説明会を国際交流会館ラウンジ以外の場所でも頻繁に行ったため、国際交流ラウンジ実施した説明会やイベントが少なく、国際交流ラウンジ内にある留学相談ブースでの相談につながりにくかった。次年度は、説明会会場から留学相談ブースへの導線を考慮する必要がある。

留学相談ブースでは、日によって相談の受けができる時間が異なる等して、学生への周知が十分ではなかった。

4 月は学生での説明会が多く、他部署の説明会と日程が重なることが多々あった。新入生、在学生への更なる事前告知が必要である。



留学フェアでの様子

## ホームページ（G 人材専用/多言語サイト等）からの情報発信

### ■目的

日本留学を検討する海外在住者、あるいは大学進学を希望する日本に在住する外国人留学希望者に対する積極的な情報提供と、その結果による就学意欲の高い留学希望者の入学を目的として、本学の学部学科構成等の基本情報をはじめ、留学生の受け入れ、国際交流に関する現況、ニュースなどを英語、中国語、韓国語で発信した。

また、情報発信の仕組みとしてウェブサイトの管理を CMS 化することにより、より迅速に対応できるようシステム開発を行った。

### ■実績

情報発信内容は、入学、卒業などの学事、国際交流に関する行事紹介、留学生の受け入れなどに関して英語、中国語、韓国語それぞれで 44 件のニュースを発信した。

また年度の切り替わりに伴う各基本情報のページにつき、更新を行った。

これらサイトへの平成 27 年度(2016/04/17～2016/03/31)アクセスの概況は、次の通りである。

	平成 27 年度				平成 26 年度			
	ページビュー		訪問者数		ページビュー		訪問者数	
	/	/news/	/	/news/	/	/news/	/	/news/
英語	52,347	484	40,213	392	43,851	482	35,659	347
中国語	18,814	192	15,088	160	12,922	222	10,410	178
韓国語	4,836	64	3,688	61	4,650	108	3,700	80

他言語サイトの訪問者数は、亜細亜大学全体のサイトのおよそ 1.5%に当たる。

なお、平成 27 年度の本学サイト全体へのセッション数は総数 1,739,240 である。その内、アクセス上位は、米国 9,603(0.55%)、中国 8,818(0.51%)、台湾 2,920(0.17%)、香港 1,449(0.08%)、韓国 2,619(0.15%)である。更にこの他として、マレーシア、インドネシア、インドから 1,000 以上のセッションがある。多言語サイトを更新後、直近 3 年の経過をみた時、インドネシア、マレーシア、ベトナムのセッション数が 1.5 倍となっている点が目立っている。

#### ■総括

①多言語でのウェブページは、昨年に比較すると、韓国のみ減少しているが英語、中国語はページビュー、訪問者とも増加している。訪問者が微増でありながらページビューが大きく増加してい

る点からは、サイト内の回遊状況が良好であることが伺われる。

②各学部・大学院の教育内容に関する情報と、入試情報に関するディレクトリの参照件数が、いずれの言語も参照される上位二つであり、受験を検討する訪問者に対しての、一定の情報提供の機能を担っていることが伺われる。

③情報掲出のフローを合理化し、効率的な情報発信を実現するために行った CMS 化の作業を終えた。今後、ニュースの選択から翻訳、ウェブへの掲出作業とそれに必要となる確認という一連の作業を効率化できるものと期待している。ただし、翻訳精度を維持することとコストをバランスさせることに関しては、今後も継続する課題である。

## 事務職員研修

#### ■目的

グローバル化する社会の要請に応え、事務職員の国際教育支援に関わる能力向上を主な目的として以下の研修を実施した。なお、事務職員の語学力に関して TOEIC®スコア 700 点以上を有する職員数を毎年、数名ずつ計画的に増やすことを数値目標としている。

①海外視察研修:平成 27 年 11 月 9 日～11 月 17 日

②TOEIC®講座による英語研修:平成 27 年 10 月 29 日～平成 28 年 1 月 21 日

#### ■実績

##### ①海外視察研修

本研修は、協定大学の視察を通して、留学制度や現地での生活に関する理解を深め、受験生や在学生に対する様々な留学相談業務を担える職員を養成することを目的としている。なお、本研修は入職 1 0 年目以内で TOEIC スコア 500 点以下の職員を主な対象とし、平成 2 7 年度は職員 3 名(教学課 2 名、学務課 1 名)をウエスタン・ワシントン大学(アメリカ・ワシントン州)に派遣し約 1 週間の視察研修を行った。

##### ③TOEIC®講座による英語研修

本研修は、TOEIC®スコア 700 点以上を有す

る職員数を増やすことを目的としている。TOEIC®指導で実績のある専門講師による約 3 か月間の短期集中講座(授業は全 1 0 回)を実施し、平成 2 7 年度は 8 名の職員が参加した。参加者には、研修前後に TOEIC®スコアの提出を義務付け、最高で 110 点のスコアアップを果たすことができた。

#### ■総括

##### ①海外視察研修

派遣した 3 名の職員は、現地の生活環境や事務部署の視察、現地職員及び派遣学生との意見交換等を行い、留学生活やアメリカの大学の学生サービスについて理解を深めることができた。また、研修の成果について学内報告会を開催し、全事務職員での情報共有も図った。本研修は 3 度目となるが、留学支援に携われる職員数が着実に増えており、本学の留学支援業務の更なる質的向上が期待できる。

##### ②TOEIC®講座による英語研修

8 名の研修参加者の内、3 名の職員が 500 点以上のスコアを取得している。また、最高で 110 点のスコアアップを果たすことができた。

(今後の課題)

海外語学研修制度や TOEIC®講座に関して、

意欲があるが業務の都合で参加できない職員が少なからずいる。今後、実施方法やスケジュール等を再検討すると共に英語力向上に取り組む職員に対して、より一層きめ細やかな支援を心掛け本学の留学制度の質の向上に資する人材の育成に努めて参りたい。

# 海外出張報告



# 多文化インターンシップ

## マレーシア(8月)

- 訪問先国……マレーシア
- 出張期間……平成27年8月7日～8月13日
- 出張者……国際関係学部教授 新井敬夫
- 主な目的……参加学生の引率、現地事情の学習指導、その他インターンシップ始動までの必要事項の指導

### ●行動日程(現地)

日時	訪問先・対応者等	概要
8月7日(金)	移動	東京—香港—ペナン間の移動
8月8日(土)	終日：ペナン地理の把握と学習 (新井、荒井、UBCT社担当者 Quah氏指導)  新井、荒井、UBCT社 Quah、Globetronics社人事人材育成担当者 KC Ng氏、学生参加	ジョージタウン市街地地理歴史、島内移動手段(旧イギリス税関・金融地区、博物館、砦、イスラム教モスク、華僑文化世界遺産地区など学習、ペナン島交通・ラピッドペナンバス確認。  夜、インターン受入れ企業関係者(担当者)とインターンシップ内容の打ち合わせ
8月9日(日)	午前：ペナン地理の把握と学習 (新井、荒井、UBCT社 Quah氏指導)  午後：担当者 同上	インターンシップ実施地区(バヤンレパス自由工業区)実地確認  マレー半島イポー市とパーム油プランテーション見学
8月10日(月)	新井帰国 終日：インターンシップ指導 (荒井、KC Ng氏)	グローブトロニクス社にて学生のインターンシップ指導、KC Ng氏
8月11日(火)	終日：インターンシップ指導 (荒井、KC Ng氏)	グローブトロニクス社にて学生のインターンシップ指導、KC Ng氏
8月12日(水) 8月13日(木)	終日：インターンシップ指導 (荒井、Quah氏)  荒井帰国	UBCT社にて学生のインターンシップ指導、Quah氏

### ●総括

多文化インターンシップの趣旨に則り、実施地域の歴史、文化、慣習、地理、および政治経済などを把握した上でインターンシップを行うという手順を踏襲しつつ、学生を引率・指導した。また、企の担当者との事前打ち合わせを行い、効果的な

インターンシップ実施のために入念な準備を行った。さらに、インターンシップ最初の数日を視察、指導し今後の指導に活かせるようにした。引き続き、当面このような形態での引率を行い、最終的には学生が自律的に出国から帰国まで行えるような体制を構築したい。

## シンガポール(8月)

- 訪問先国……シンガポール
- 出張期間……平成27年8月7日～8月13日
- 出張者……国際交流課参事補 寺尾浩一
- 主な目的……多文化インターンシップ実施に伴う学生同行、及びインターンシップ受入企業との打合せのため

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
8月7日（金）	移動	成田-シンガポール（学生同行）
8月8日（土）	シンガポール市内	公共交通等を利用しつつ、市内視察を行い、買い物等で気をつけることを説明し、通勤手段を確認する
8月9日（日）	午前：シンガポールの歴史等フィールドワーク 午後：各企業への通勤シミュレーション	シンガポールの歴史に関し、博物館等を利用しながら、フィールドワークを行う 宿舎から各社への通勤シミュレーションを行い、公共手段の乗り継ぎ時間等詳細事項を確認する
8月10日（月）	Media Japan 社	インターンシップ学生受け入れに関する事務詳細事項（残業、疾病時、出張、事後評価方法等）確認 インターンシップ学生の大学での様子等を含め詳細を紹介 インターンシップ受け入れ企業からの要望確認
8月11日（火）	Prestige International 社 NNA Singapore	同上
8月9日（日）	Compass Holdings 社 Island Tree 社	同上

●総括

- ①シンガポールでのインターンシップ実施2年目であり、受け入れ企業側の体制も慣れてきており、インターンシッププログラム内容もより充実していた。各企業担当者は初日から、学生に対して指示を与え、学生が困れば、その対応をするというサイクルが確りとしていた。
- ②シンガポールは観光地としては有名だが、その歴史をある程度知っている学生は殆どいない。学

生たちはシンガポールの若い世代と一緒に業務体験をするので、日本人学生は歴史をある程度理解したうえで、本インターンシップに望むべきである。これも事前研修プログラムに加えるべき出ると考える。

- ③2年次に米国留学をしている学生が殆どで、英語で理解することに問題が無いため、市内視察等で公共の交通機関にはすぐに慣れていった。

## インド・シンガポール (8月)

- 訪問先国……インド・シンガポール
- 出張期間……平成27年9月16日～9月24日
- 出張者……国際関係学部特任教授 九門 崇、国際交流課参事補 寺尾浩一
- 主な目的……多文化インターンシップ実施に伴う学生同行、及びインターンシップ受入企業との打合せのため

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
9月18日（金）	午前：マドラス大学訪問 午後：JETRO チェンナイ事務所訪問	新規協定締結のための交渉及び現地でのサマープログラム実施のための意見交換 チェンナイ日系企業に関する情報収集とマドラス大学との協定締結に向けた意見交換
9月19日（土）	移動	マドラス-チェンナイ
9月20日（日）	在バンガロール企業訪問 The Chancery、Wajo	在バンガロール企業でインターンシップを受け入れる際の条件等情報収集と意見交換
9月21日（月）	在バンガロール日本領事事務所訪問  バンガロール発	在バンガロール日系企業と日本文化活動に関する情報収集 移動
9月22日（火）	シンガポール着 Prestige International 社、	移動 インターンシップ生の研修中行動・成果確認

	Compass Holdings 社、NNA Singapore 社	来年度に向けた改善点等の確認
9月23日(水)	Tree Island 社、Media Japan 社	インターンシップ生の研修中行動・成果確認、来年度に向けた改善点等の確認

●総括

①在チェンナイでのインターンシップの受け入れはまだ少ないようである。受け入れ企業側の心配は、宿舎企業間での移動の際の安全確保であった。

②シンガポールでは、2回目のインターンシップであった。学生たちに対する企業担当者の評価は高かった。また、学生たちの成長度合いを高めるための指摘も的確で、帰国後に確りとフィードバックしたい。

③新規協定校開発（マドラス大学）に関しては、可能性はあるものの、様々な人間関係を駆使して、今後も継続的にコンタクトを取らなければならないと考える。学長が変わる可能性がある様で、現段階でどのレベルの教職員と意見交換を続けなければいけないのか、見極めるのが大変難しい。インド特有の仕事の進め方のアドバイスを JETRO スタッフに頂いたので、再度戦術を考え直さなければならない。

中国(8月)

多文化フィールドスタディー・AUGP・AUEP含む

- 訪問先国……中国・香港
- 出張期間……平成27年8月7日～9月9日
- 出張者……国際関係学部准教授 三橋秀彦
- 主な目的……(1)多文化フィールドスタディー支援(アンケート調査、施設見学ほか)(2)多文化インターンシップ支援(研修先との調整、現地でのオリエンテーション)(3)AUGP(中国)における企業視察引率(日系4社)(4)AUEP参加学生のインターンシップ先との調整

●行動日程(現地)

日時	訪問先・対応者等	概要
8月7日(金)	午後：学生宿泊先、その付近	インターンシップ期間中の生活環境に関する指導(交通機関ほか)
8月8日(土)	午前：学生宿泊先付近 午後：South Ocean	生活環境に関する指導 インターンシップ先の担当者との面談(対応者 現日本部門総経理、新日本部門総経理)
8月9日(日)	午前：移動 午後：ホテルオークラ(マカオ)	香港-マカオ 卒業生に対するインタビュー・施設見学
8月10日(月)	午後：South Ocean 宿泊先	インターンシップに関する調整(インターンシップ初日)(対応者 現日本部門総経理) WKK社インターンシップに関する調整
8月11日(火)	午前：South Ocean 午後：宿泊先	インターンシップに関する調整(対応者 現日本部門総経理) 学生指導、企業訪問準備
8月12日(水)	午前：移動 午後：北京師範大学	香港-北京 学生指導：学習状況に関するヒアリング
8月13日(木)	北京師範大学	学習環境視察、学生指導：アンケート作成準備
8月14日(金)	午前：北京図書大廈 午後：北京師範大学	資料収集 学生指導：アンケート作成準備
8月15日(土)	午前：中国国家博物館 午後：宿泊先	視察(学生引率) 各種連絡業務
8月16日(日)	午前：中国国家博物館 午後：宿泊先	資料収集 各種連絡業務
8月17日(月)	午後：中青学研	企業視察(対応者 総経理、総経理助理)
8月18日(火)	午前：宿泊先 午後：ハウス食品(中国)	各種連絡業務 企業視察(対応者 上海ハウス食品社長)
8月19日(水)	午前：宿泊先	各種連絡業務

	午後：北京師範大学	学生指導：アンケート作成準備
8月20日(木)	午前：宿泊先 午後：北京師範大学	同上
8月21日(金)	午前：宿泊先 午後：長富宮飯店	各種連絡業務 企業視察(対応者 副支配人ほか)
8月22日(土)	午後：宿泊先	学生指導(現(上海)、新(大連) AUEP生の 企業研究・インターンシップ準備)
8月23日(日)	終日：抗日戦争記念館	視察(学生引率)
8月24日(月)	午前：北京師範大学 午前：中国伝媒大学	授業見学 施設見学(アニメーション・デジタル芸術学院、 広告学院)(対応者 広告学院教授ほか)
8月25日(火)	午前：宿泊先 午後：セブンイレブン東直門店	各種連絡業務 企業視察(対応者 セブンイレブン(北京)非 日曜日部長)
8月26日(水)	終日：北京師範大学	学生指導、アンケート実施
8月27日(木)	午前：頤和園 終日：北京師範大学	学生引率(AUEP生 2名) 学生指導、アンケート実施
8月28日(金)	終日：北京師範大学	学生指導、アンケート実施
8月29日(土)	午前：北京-深圳	移動、深圳市内見学
8月30日(日)	終日：香港	学生引率(観光)
8月31日(月)	午前：WKK社 午後：深圳テクノセンター	学生引率(インターンシップ開始)(対応者 科 技城副総経理) 学生引率(インターンシップ先への経路確認)
9月1日(火)	午前：宿泊先	各種連絡業務
9月2日(水)	午前：移動 午後：上海市内	深圳-上海 インターンシップ先への経路確認
9月3日(木)	午後：宿泊先 午後：虹橋駅ほか	各種連絡業務 学生迎え、上海観光
9月4日(金)	午前：宿泊先 午後：南京路ほか	各種連絡業務 市内観光
9月5日(土)	終日：極楽湯(上海)	他大学(学習院大学経済学部渡邊ゼミ)企業調 査参加 卒業生に対するインタビュー・施設見学
9月6日(日)	午後：コンベンションセンター ほか	インターンシップ先への経路確認
9月7日(月)	午前：FNA 午後：宿泊先	学生引率(インターンシップ初日)(対応者 副 総経理) 各種連絡業務
9月8日(火)	午前：コンベンションセンター 午後：マイツ(上海)	学生引率 インターンシップ予定者紹介、インターンシ ップ調整(対応者 総経理)

### ●総括

8月7日から9月9日まで、以下の4つのテーマに関係する学生の現地研修先へ行き、それぞれのテーマで学生支援を実施した。

(1) 多文化フィールドスタディー：学生達の北京でのアンケート調査の支援が作業の中心となるが、このほかに中国理解のために北京の教育、文化機関を訪問した。今年は、国家博物館、抗日戦争記念館、中国伝媒大学(広告学院、デジタル・メディア芸術学院)が訪問先である。

(2) 多文化インターンシップ：昨年のインターンシップ先が2地点3社(香港、深圳)であったのに対し、今年は4地点4社(香港、深圳、東莞、上海)、参加者も6名から12名に増えた。またイ

ンターンシップ先として新たに香港企業が加わった。このため大規模、多様化に合せ支援の内容を調整した。

(3) AUGP(中国)期間中の企業視察における学生引率。今年も「中国における日本型サービス」をテーマに各分野を代表する以下の日系企業を訪ねた。訪問先は次の通り。長富宮飯店(ホテルニューオータニグループ)、ハウス食品(中国)、学研、セブンイレブン(北京)。

(4) 2014年に実験的に試みたAUEP期間中のインターンシップであるが、初年度の学生の2回にわたるインターンシップが終了したため、研修先(マイツ(上海))を訪問し、フォローアップ

のヒアリングを行うと同時に、2015年度のインターンシップに関する調整を実施した。

2014年夏に初めて実施した研修のスタイル（北京、上海、深圳、香港の4か所で4つのテーマで研修を実施）を、今年は規模、内容ともにより充実させた形で実施できたことが最大の出張成果である。一方、4つのテーマをひと夏に実施した場合、担当者にとっては、最低でも4週間にわたる長期出張が業務として求められる。また現在のカリキュラムでは多文化フィールドスタディー・同インターンシップがともに3年次開講である関係で、学生が両方に参加した場合、北京におけるAUGP(中国)（その期間中の多文化フィールドスタディーを含む）での3週間の後、続けて深圳、東莞、上海での1-2週間のインターンシップをすることになり、教師、学生ともに期間、経費の面で費やすコストが大きい。このため、

両科目の開設学年の多様化等、学科の学修の柱であるフィールドスタディー、インターンシップのそれぞれを学生、教師双方が余裕を持って体験できる制度設計の必要性が指摘できよう。



## 韓国（8月）☆

- 訪問先国……韓国
- 出張期間……平成27年8月14日～8月20日
- 出張者……アジア研究所教授 奥田 聡
- 主な目的……多文化インターンシップ実習視察及び次年度以降の受け入れ交渉のため

### ●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
8月14日(金)		入国
8月15日(土)	インターンシップ参加者3名	インターンシップ実施前の打ち合わせ
8月16日(日)	金柄徹(多文化コミュニケーション学科教授)	インターンシップ参加者(KIEP)の任地同行
8月17日(月)	対外経済政策研究院(KIEP) 国際マクロ金融本部長 日本チーム長 ほか	インターンシップ受け入れ先への学生同行、来年度以降の本学学生インターンの受け入れ要請、執務環境・周辺環境の調査
8月18日(火)	セヌリ党議員、国会情報委員会委員長 韓日産業技術協力財団 日本貿易振興機構(JETRO)ソウルセンター 所長 調査チーム課ほか	インターンシップ事業への協力要請(電話) 同上 来年度以降の本学学生インターンの受け入れ要請、執務環境・周辺環境の調査
8月19日(水)	KIEPアジア太平洋本部長	インターンシップ参加者に対する指導要請
8月20日(木)		帰国

### ●総括

- ① 実施中の問題発生時における対処法、出退勤時の安全確保、朝鮮半島有事の際の行動、金銭管理などについてインターンシップ参加者に指示した。
- ② インターンシップ参加者からの相談を随時受けられる態勢を取った。相談・指示はメー

ルにより実施した。JETRO への派遣者についてはやや高度な技法が要求されたため参考資料の紹介、提出資料の監修などサポートを行った。

- ③ インターンシップ受け入れ先での執務環境は良好であり、指導体制も満足すべき水準であった。ただし KIEP については公共交通の便が必ずしも良いとは言えず、今後の課題と言えよう。これと関連し、KIEP スタッフおよび同所でのインターンシップに参加している韓国人学生に対し、本学学生への出勤時の交通や社内生活全般についてのサポートを要請した。
- ④ JETRO、KIEP に対しては、来年度以降のイン

ターンシップ受け入れを要請し、良好な感触を得た。今後インターンシップ参加希望者が増えた場合に備え、韓日産業技術協力財団に対してインターンシップ事業について紹介し、今後の協力を要請した。

- ⑤ 現状、韓国インターンシップにおける受け入れ先での業務内容は参加者個人の関心に基づくプレゼンテーションを主とするが、参加希望者の多くが思い描くインターンシップ像とのかい離があるのは否めない。事務補助や資料作成、接客など企業における一般的な作業内容、あるいは文化・芸術・服飾など参加者の関心分野に近い受け入れ先の開拓が今後の課題となろう。

## 韓国(3月)

- 訪問先国……韓国
- 出張期間……平成 28 年 3 月 10 日～9 月 12 日
- 出張者……アジア研究所教授 奥田 聡、  
国際交流課主事補 矢吹知大
- 主な目的……多文化インターンシップ次年度の受け入れ交渉のため

### ●行動日程(現地)

日時	訪問先・対応者等	概要
3 月 10 日(木)	ソウル市内宿舎調査	新たな宿舎の環境調査
3 月 11 日(金)	午前：日本貿易振興機構 (JETRO) ソウル事務所 所長 午後：ソウル市内宿舎調査	次年度以降の受け入れ交渉  新たな宿舎の環境調査

### ●総括

- ①日本貿易振興機構ソウル事務所では、平成 28 年度の韓国での実習を希望している学生数に基づき、8 月中旬から 2 週間、1 名の受け入れを依頼し、ソウル事務所としては受け入れ可能との回答を得たが、受け入れ実現のための協定締結等は、東京の本部と改めて交渉することとした。
- ②今年度まで使用していたソウル市内の宿舎が、来年度の参加人数によっては使用できなくなる

可能性があり、1 名でも使用可能な宿舎の候補を出張前に 3 件選定し、それぞれの環境調査を行った。いずれもセキュリティ面で問題なく、通勤可能な圏内に立地しており、夜間でも深夜前であれば危機管理意識を持っていれば問題ないことを確認した。

# 多文化フィールドスタディー

## ベトナム(8月)

- 訪問先国……ベトナム
- 出張期間……平成27年8月18日～8月26日
- 出張者……国際関係学部講師 大塚直樹
- 主な目的……多文化フィールドスタディー(ベトナム)の学生現地調査の引率および新規調査地の開拓

### ●行動日程(現地)

日時	訪問先・対応者等	概要
8月18日(火)	夜: ホーチミン市第1区	引率学生とホテル周辺の街並みの確認・ミーティング
8月19日(水)	午前: ホーチミン市 午後: ドンコイ通り・デタム通り 夜: ミーティング	市内の街並みを確認 景観調査、ベンタイン市場の見学
8月20日(木)	午前: ドンコイ通り・デタム通り 午後: ドンコイ通り 夜: ミーティング	店舗調査 観光施設の観察
8月21日(金)	午前・午後: ドンコイ通り・デタム通り 夜: ミーティング	観光客へのインタビュー調査
8月22日(土)	午前・午後: クチトンネル 夜: ミーティング	パッケージツアーの参与観察的調査
8月23日(日)	午前: ホテル周辺 午後: ドンコイ通り、サイゴンスカイデッキ 夜: ミーティング	旧市場見学 インタビュー調査、市内の俯瞰的景観観察
8月24日(月)	午前: チョロン 午後: ドンコイ通り周辺 夜: ミーティング	ビンタイ市場の見学 インタビュー調査
8月25日(火)	午前: スイティエン観光区 午後: ドンコイ通り 夜: ミーティング	観光施設の調査 インタビュー調査

### ●総括

2回目となる学生引率を伴う海外フィールド調査を実施した。今回は、昨年度と異なり調査地をベトナム最大の経済都市ホーチミン市に設定した。出発前の段階では、日本とは異なる交通事情(オートバイの多さなど)から、学生の安全確保について若干の不安を持っていた。しかし、学生たちは、こちらの予想以上にすぐに現地の状況に慣れ、適応していた。また、異国の地でのインタビュー調査を通じて、参加学生が現場適応力や積極性を身につけられたと実感することができた。インタビュー調査は、約50名から回答を得ており、こちらも教員側の予想を上回る数字であった。昨年度のホイアンは、世界遺産区としてまとまりを持った地域であり、相対的にインタビュー調査が実施しやすい環境下にあった。これに対して、ホーチミン市という広大なエリアにおいてインフォーマントを見つけ、インタビュー調査を実施することはさまざまな面で苦勞をとも

なると推察される。こうした点は、インタビュー調査数という量的問題には還元できない評価ポイントである。くわえて、昨年度同様、毎晩全員でミーティングをおこない、その日の調査成果や問題点を共有することで、翌日の課題を発見することができた。調査結果については、帰国後に成果報告会にてグループ発表し、成果報告書も作成した。

今度の課題としては、第1に、フィールド調査の質の向上を目指したい。ここ2年間の経験から、学生の非母語によるインタビュー調査の実行力を確認できた。今後はフィールド調査自体を精緻化してゆきたい。そのためには、まず周到な事前準備が必要となる。出発前(前期授業中)に十分な事前学習をおこなうことで、現地体験をより充実したものにするよう方向づけたい。次に、インタビュー調査の効率化である。フィールドワークは「非効率」なものであるが、(短期調査の)

学生体験という視点に立ったとき、ある種の効率性の追求が調査の質の向上につながる可能性が高い。第2に、昨年度も述べたが、体調管理の大切さである。やはり熱帯の気候下で屋外調査を

施することは、肉体的にも精神的にもさまざまな制約が生じる。すべての参加学生が十分な休憩をとりつつ、いかに効率的に調査を実施できるかが今後重要となる。

## 韓国(8月)

- 訪問先国……韓国
- 出張期間……平成27年8月10日～8月18日
- 出張者……国際関係学部教授 金柄徹
- 主な目的……多文化フィールドスタディー(韓国)の実施に伴う、ソウルでの指導及び現地調査のため

### ●行動日程(現地)

日時	訪問先・対応者等	概要
8月11日(火)	ソウル 民俗博物館・景福宮・仁寺洞・明洞など	見学
8月12日(水)	明洞・清溪川・NANTA劇場	アンケート調査実施及び公演見学
8月13日(木)	慶熙大学構内	アンケート調査実施
8月14日(金)	板門店(JSA)	見学
8月15日(土)	博物館・美術館・大学街・映画館など	自主見学・調査活動
8月16日(日)	学生：仁川→成田	移動
8月17日(月)	ソウル市内	フィールドワーク候補地調査

### ●総括

#### ①学習成果

14人の学生と韓国を訪れ、民俗博物館・景福宮・仁寺洞・明洞などを見学し、伝統文化だけでなく、様々な韓国文化を体験できた。そして、ソウルの繁華街や大学街で、重要課題であるアンケート調査を実施した。設問紙は日本での授業で各自が作成したもので、そのテーマは、若者と飲酒文化、流行、伝統衣装への関心、早期留学と家族観、学生の経済事情、観光に関する意識、映画事情、スマートフォンの利用状況、ファッション感覚、若者の交際など、多岐にわたった。異文化での調査はかなりハードな作業である。勇気を出して声をかけても相手に断られたり、無視されたりすると、挫けて落ち込んでしまう場合もある。だが、この

ような失敗と挫折があっても、それを乗り越える術を知ることができるもので、仲間同士で励ましながら再チャレンジし、韓国語が通じなければ、英語やジェスチャーなどで懸命にコミュニケーションをとっていた。これらの経験は、今後参加者にとって貴重な財産になっていくと思われる。

#### ②今後の課題

調査地としてソウルを選定しているが、将来的には、釜山や済州島などでも実施できればと思う。また、滞在中に2～3日でも、同年代の韓国の若者の家にホームステイすることも今後の目標としているので、現地の大学関係者と調整していくことにしたい。



明洞でのアンケート調査



協定校の慶熙大学校でのアンケート調査



## フィリピン(9月)

- 訪問先国……フィリピン
- 出張期間……平成 27 年 9 月 3 日～9 月 20 日
- 出張者……国際関係学部講師 小張 順弘
- 主な目的……多文化フィールドスタディー（フィリピン）実施のため

### ●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
9月4日（金）	エコパーク視察（リロアン）	自然を観光資源として運営するエコパークを視察 リロアン地域視察（市場、港など）
9月5日（土）	縫製工場視察（ミングラネリア） Fancy Co. Ltd.	日本向けウェディングドレス工場視察 ミングラネリア地域視察
9月6日（日）	マクタン島視察	スペイン植民地時代の史跡を訪問 リゾート視察
9月7日（月）	サンカルロス大学プログラム （1日目） （1）学術提携 （2）歴史学 （3）言語学 合同フィールドワーク（セブ市内）	（1）「オリエンテーション」 （2）「フィリピンの歴史」 （3）「セブアノ語」 現地学生とのフィールドワーク
9月8日（火）	サンカルロス大学プログラム （2日目） （1）政治学 （2）言語学	（1）「日比政治的関係」 （2）「セブアノ語」 現地学生とのフィールドワーク
9月9日（水）	サンカルロス大学プログラム （3日目）	現地学生とのフィールドワーク
9月10日（木）	サンカルロス大学プログラム （4日目） （1）国際関係学 （2）言語学	（1）「アセアンの現在」 （2）「セブアノ語」 大学授業参加（国際関係学）、現地学生との フィールドワーク
9月11日（金）	サンカルロス大学プログラム （5日目）	発表準備、フィールド調査結果発表会
9月12日（土）	NGO 訪問（4日目） Alay Kapwa Cebu, Program Coordinator	NGO(Alay Kapwa)の活動概要見学 ホームステイ
9月13日（日）	NGO 訪問 ホームステイ	NGO(Alay Kapwa)の活動概要見学 青年メンバーとの交流会/地域調査発表会
9月14日（月）	PureFood 訪問 移動 セブ・マニラ	ドライマンゴー工場見学 オルティガス宿舎へ
9月15日（火）	語学研修（1日目） SELC マニラ校	英語学習モニター体験
9月16日（水）	語学研修（2日目） SELC マニラ校	同上
9月17日（木）	語学研修（3日目） SELC マニラ校 フィリピン日系人リーガルサ ポートセンター事務所訪問 （事務局長）	英語学習モニター体験  フィリピン日系人問題についてブリーフィング
9月18日（金）	教育省訪問（日本工営） 博物館訪問、マカティ市内見 学	フィリピン教育改革についてのブリーフィング 博物館でのフィリピンの歴史・社会の展示見学 マニラ首都圏内視察

9月19日(土)	パサイ市内見学 参加者振り返りミーティング	マニラ首都圏内視察 フィリピン滞在についての総括
----------	--------------------------	-----------------------------

●総括



NGO 訪問



現地企業訪問



現地大学特別講義

本プログラムでの期間中、参加学生たちは無事に現地滞を終えることができた。また、限られた時間の中で、参加学生たちは多面性を持つフィリピン社会の現実に触れ、「旅行者」「観光者」として現地を訪問しているという意識ではなく、「学習者」としての姿勢を持ち、意味のある現地体験を得ることができた。様々な場所を訪問し、調査活動を実施や、慣れない食・住環境の中の滞在は体力的にも、心理的にも負担であったようであり、腹痛、食欲不振、発熱などの症状を訴え、活動に参加することができずに休養を強いられる学生もいた。以下、今後の課題について簡略にまとめる。

①現地プログラムについて

今回で3回目を迎えた現地大学生との合同フィールドワークは、参加学生たちからも大変好評であった。本学学生と実施しているフィールドワーク形式(Student Ambassadorの名称)をモデルとして、海外の大学からの訪問学生に対して同様の制度を導入し始め、現地大学生がこの種のプログラムでの経験を重ねてきたこともあり、安心してセブ市内での行動を任せることができた。

また、企業・政府機関・NGO訪問やホームステイでは、観光では見ることのできない現地での生活に触れる良い機会であったとの感想が多くあった。今後の実施にあたっては、現地でのプログラム内容・実施日数・経費などを総合的に再検討し、学生が現地での安全を確保するために自己管理を行いつつ、主体的に行動ができる機会の確保を検討していきたい。

②参加学生の体調管理について

夏季休暇中に実施するプログラムのため、学生は学期中には取り組むことのできない様々な活動を夏季休暇中に予定している。今回のプログラム実施期間のみならず、その他期間における海外渡航や学生活動について、引率者は把握しておく必要性を感じた。個人のプライバシーとの関係もあるが、参加学生の体調管理や滞在中の危機管理について、現地滞在中の予定だけではなく、特に参加前の予定などの確認が必要である(特に、睡眠時間や体調など)。

今回、セブでの滞を終え、マニラ滞在中に体調不良を訴えた学生がおり、現地医療機関で診断(血液検査)を受けて Dengue 熱の疑いが指摘されたが、結果は陰性であり事なきを得た。本プログ

ラム参加前には2週間程度の海外旅行をしており、疲労がたまった状態での参加であり、夏季休暇中の学生の健康状況や体調管理について無理のない計画立案の指導が必要である。

# AUGP

## インド(2~3月)☆

- 訪問先国……インド(プネー、ムンバイ、デリー)
- 出張期間……平成28年2月21日~3月5日
- 出張者……国際関係学部教授 新井敬夫、  
国際交流課書記 富田祐香
- 主な目的……(1) AUGPインドの運営体制及び危機管理体制の確認  
(2) フィールドトリップ引率  
(3) ホームステイ先や大学周辺等の生活環境調査  
(4) AUEP派遣の可能性について現地担当者と協議  
(5) AUGP(短期留学)参加学生の往復経由地の現地事情を把握・確認し、現在の経由地(ムンバイ)と候補地(デリー)の選択の材料を収集する。交通の利便性や安全性確認とともに、当地滞在中の歴史・文化、政治経済などの実地学習機会を模索する。

### ●行動日程(現地)

日時	訪問先・対応者等	概要
2月22日(月)	ティラク・マハーラーシュトラ大学 Sadashiv Peth キャンパス訪問、 面会者：Shipad Bhat 氏  面会者：Shrikant Atre 氏 参加者ホームステイ先訪問	プログラムディレクターとの面会及びヒンディー語授業の見学 交換留学の可能性について協議 ホームステイ先受け入れ状況、生活環境の確認 面会者：Shilpa and Ajay Laddha 両氏、参加学生
2月23日(火)	フィールドトリップ先視察  参加者ホームステイ先訪問	研修の一環である学生のフィールドトリップ先(プネー市内)の視察 ホームステイ先受け入れ状況、生活環境の確認 面会者：Chetana and Rajeev Gosavi 両氏、学外参加者
2月24日(水)	新井：ムンバイ生活環境調査および校外学習候補地調査 プネー駅、およびプネー長距離バスステーションムンバイ行きバスムンバイ長距離バスステーション(ダダール駅) 富田：AUGPコーディネーターとの打ち合わせ、プネー生活環境調査および校外学習候補地調査	学生の留学地プネー-ムンバイ間の移動手段、手順、時間を確認しつつ(時刻表、チケット購入手段)、長距離バスにて移動。午後、旧英植民地時代の公共施設など市街地中心部視察。  Chetana Gosavi 氏と今後のサポート体制のあり方、週末アクティビティについて協議
2月25日(木)	新井：ムンバイ生活環境調査 学習候補地視察、ムンバイ(中央)駅視察、ムンバイ(中央)駅-ダダール駅(長距離バスステーション)連絡列車搭乘、長距離バスにてプネー到着 富田：プネーの生活環境調査および校外学習候補地調査	ムンバイ大学、博物館、図書館視察 午後：海浜地区から-市街地中心部-ムンバイ駅までの地理・移動時間を確認し同駅に到着。同駅の概要視察調査。ムンバイ駅からプネー行きバスステーション(ダダール駅)までの近距離連絡列車確認。 学生のホームステイ先が集まるプネーの新市街地を中心に視察。学生指導用の資料収集

2月26日(金)	フィールドトリップ同行(エローラ)	エローラ、アジャンタ石窟へのフィールドトリップに同行。早朝にチャーターバスで移動し、午後に到着。フィールドトリップ先(エローラ石窟群、グリシュネシュワール寺院)では、英語でインドの歴史、ヒンドゥー教についての講義を受けながら視察
2月27日(土)	フィールドトリップ同行(アジャンタ)	フィールドトリップ先(アジャンタ石窟群)では、英語で仏教についての講義を受けながら視察
2月28日(日)	フィールドトリップ同行(ダウラターバード) シャープインド社長と会談  参加者ホームステイ先訪問	ダウラターバード要塞を視察後、ブネーに向けて移動 企業訪問等今後の連携の可能性を協議  ホームステイ先受け入れ状況、生活環境の確認 面会者: Pradnya and Shripad Deshpande 両氏、参加学生
2月29日(月)	ティラク・マハーラーシュトラ大学メインキャンパス訪問	副学長 Deepak Tilak 氏と面会、交換留学を含めた本学との協定関係の今後方向性について協議 学内(教室、図書館、食堂、学生寮等)を視察
3月1日(火)	移動(ブネー-デリー) 富田 帰国 新井: デリー滞在	
3月2日(水)	ラールキラール周辺とオールドデリー視察	歴史、文化関連視 察生活環境調査および校外学習候補地調査
3月3日(木)	ニューデリー、オールドデリー間交通調査	生活環境調査および校外学習候補地調査 デリー駅概要および地下鉄駅など駅周辺調査・視察、駅から中心街までの移手段・デリー市内交通事情調査。コンノートプレイスビジネス街視察
3月4日(金)	午前: 生活環境調査および校外学習候補地調査、ニューデリー地区視察	インド門周辺、官庁街および国立博物館にて視察、学習資料収集

### ●総括

#### 【交換留学(AUEP)の可能性について】

ティラク・マハーラーシュトラ大学とは、2015年に交換派遣協定を締結しているため、交換留学(AUEP)を実施できるかどうか履修、生活面での調査を行った。同大学にはヒンディー語を学ぶ既存のコースがないため、交換生をTMVに派遣した場合、ヒンディー語、マラティー語または英語で学部の授業を受講することになる。学部での授業を受けるにあたっては、基本英語で開講される学部も一定数あるが、ヒンディー語の参考資料等を使用する場合もあるため、交換生は英語及びヒンディー語の両方を履修しているが必要である。コースによっては、ヒンディー語だけでなくマラティー語が必要な場合がある。

また、ティラク・マハーラーシュトラ大学の学生が本学に留学する場合の受け入れについては、先方のニーズと受け入れの諸条件を確認してから改めて返事をするようになった。ブネーは、インドで最も日本語学習者が多く、同大学でも日本語教育には力を入れていることから、短期研修も含めて様々な受け入れ形態の可能性を検討していきたい。派遣・受け入れ双方の調整ができ次第、

交換生を募集し、選抜試験を実施することとなった。

#### 【AUGPの運営について】

AUGPでは、プログラムコーディネーターがホームステイの手配を行っている。ホームステイ先選定の際には、必ずコーディネーターと面識があること、滞在先家庭の構成員と学生の性別に配慮しているとのことであった。今回訪問した3家庭も、過去にプログラムコーディネーター自身も学生を受け入れており、AUGPでヒンディー語の授業を担当していた教員等の家庭でお世話になった。部屋の設備も問題なく、食事も健康に配慮されたものであり学生の満足度も高かった。学生寮と比べるとホームステイの方が若干割高ではあるが、一般家庭での生活を体験できること、ヒンディー語の会話練習の機会も増えること等を考慮すると、インドでのホームステイ型のプログラムは研修の一つの魅力である。ただし、学内の寮の方が安価ではあるため、今後参加費用の高騰が原因で参加人数が集まらない、プログラムの中止が続く場合は滞在形態を見直す必要もある。

研修期間はヒンディー語以外に毎週アクティビティが含まれており、1週目はプネー市内の観光、2週目は1泊2日の農村体験（今年度はプネー郊外のWai）、3週目は2泊3日のエローラ、アジャンタ石窟へのフィールドトリップが研修として含まれている。今回の視察では、コーディネーターとフィールドトリップに同行し、移動経路、手段、宿泊先、ガイドの手配等の安全管理体制を確認できたことは非常に有益であった。アクティビティについては、企業訪問を希望する学生もいたことから、今後は事前研修会等で希望する活動をヒアリングし、コーディネーター内容を調整していくこととなった。

【留学地プネーおよび経由地ムンバイ、デリーの生活環境調査および校外学習候補地調査】

◎プネーでの生活環境調査および校外学習候補地調査

プネーは、インドで最も高等教育機関が多い研究・教育の中心であるため、街中では学生を見かけることが多く、治安についても特段問題となる点は見当たらなかった。ただし、時間と場所によっては注意が必要であるため、今後の研修会においてもさらに具体的に注意を促していく。プネーではタクシーがそれほど多くないため、ホームステイ先から大学まではオートリキシャで通学する。事前研修会では、担当教員からリキシャの乗り方、注意点についての指導があるが、場所によっては不当に高い料金を請求してくる場合があるため学生にはさらに注意を促す必要がある。AUGPでは希望すれば、コーディネーターが定額で同じ運転手のオートリキシャを契

約してくれるため、通学時には面倒な料金交渉等をすることなく安心して通学できる。公共のバスは、街中で見かけることも多かったが、満員の状態でドアが開いたまま走行しており、安全面から乗らないほうがよいように思われた。

◎ムンバイ及びデリーでの生活環境調査および校外学習候補地調査

日本からは、協定大学ティラク・マハーラーシュトラ大学所在地プネー空港への直行便がないため、現在ムンバイ到着便を利用している（そこからすぐに陸路プネーに移動しているが数時間かかる）が、ムンバイでの実地学習機会はない。しかし、今回の調査で、ムンバイに数日間の滞在機会を設定すれば有意義な学習機会を提供できることを発見した。国際関係を考える上で、旧英国関係施設や博物館などは有益であろう。日本-デリー-プネー便利用は、陸路を使用する必要がない点で優位性がある。この場合、首都デリーでの学習機会が設定できる。オールドデリー、ニューデリーともに歴史、文化、政治経済、経緯発展などのテーマが考えられる。いずれにせよ、プネーは文化都市なので、今後、政治経済にテーマを発展させる場合の校外学習の場所としては、経由地の有効利用が考えられるだろう。ただ、両地での学習にはツアーなどを利用したほうが良い。フィールドスタディーのような学生による自由調査を行う場合には、交通事情把握、安全性への理解などの点から相当の事前学習が必要となる。公共交通や駅の利用は学生にとってかなりハードルが高い。



大学での授業



小堂でのレクチャー



プネーの街並み

# アジア夢カレッジキャリア開発中国プログラム

## 現地受入関連

- 訪問先国……中国・大連
- 出張期間……平成 27 年 6 月 7 日～6 月 12 日
- 出張者……アジア研究所教授 西澤正樹、  
国際交流課参事補 寺尾浩一
- 主な目的……平成 27 年度 AUCP 派遣予定学生  
(11 名) 現地受入準備として、大連  
外国語大学漢学院及びインターン  
シップ先企業との協議のため

### ●行動日程 (現地)

日時	訪問先・対応者等	概要
6 月 7 日 (日)	午後：冬季インターンシップ 期間中宿舎視察	インターンシップ実施期間中の学生の案全確保 の為に市内宿舎を予約すべく候補宿舎を視察
6 月 8 日 (月)	午前：大連松下汽車電子系統 有限公司、東芝大連有限公司 午後：大連恒立国際貿易有限 公司、富士電機大連有限公司、 大連三島食品有限公司	留学・インターンシップ予定 (11 名) の各企業 での受け入れ依頼とその確認
6 月 9 日 (火)	午前：日本貿易振興機構大連 事務所、在瀋陽日本国総領事 館在大連出張駐在官事務所、 日本瑞穂実業銀行股份有限公 司 大連分行 午後：遼寧傑仕孚 (ジャスフ) 律師事務所、日本法円坂律師 事務所 大連代表処、大連泰和 信息技术有限公司、大連漫步 广告有限公司	同上
6 月 10 日 (水)	午前：蜻蜓文具商貿 (大連) 有限公司、大連中国国際旅行 社有限公司、大連慧搜网技術 有限公司 午後：全日本空輸株式会社 瀋 陽・大連支店、ホームクリニッ ク大連、大連外国語大学との 打合せ	同上
6 月 11 日 (木)	午前：大連愛光浸漬成型有限 公司、嘉時泰国際物流 (大連) 有限公司、大連市経済技術開 発区招商中心招商一局一部 午後：米克羅彈簧(大連)有限公 司	同上

### ●総括

①昨年度までインターンシップ受け入れ企業から、「インターンシップ期間中の大連は厳冬期であり、毎日の就業体験終了後に、大連外国語大学旅順キャンパスの寮までバスで帰るのは、路面凍結等の理由で危険ゆえ、市内インターンシップ組み学生に関しては、市内宿舎を確保して欲しい」との要望があった。その宿舎を確保できた点は、インターンシップ受け入れ企業、及び学生に対し

て安心感を提供できることとなった。就業体験後の他企業社員と本学学生の交流も増え、学生にとっても学びの場が広がったことは、学生の成長にとって大変有意義なことであった。

②各企業におけるインターンシップ学生受け入れ体制は、毎年のことではあるが、その内容がより充実しており、学生にとっては素晴らしい学びの場だと思った。

## オリエンテーション及びキャリア指導など

- 訪問先国……中国・大連
- 出張期間……平成 27 年 8 月 31 日～9 月 7 日
- 出張者……アジア研究所教授 西澤正樹、国際関係学部特任教授 九門 崇、国際交流課参事補 寺尾浩一
- 主な目的……夢カレ 11 期生（11 名）を引率し、大連外国語大学にてオリエンテーション及びキャリア指導を行うほか、インターンシップ派遣予定企業との打合せの為

### ●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
8 月 31 日（日）	午後：大連外国語大学	学生引率、入寮手続き等、生活基盤の確認
9 月 1 日（月）	午前：全日本空輸株式会社 瀋陽・大連支店、日本貿易振興機構大連事務所、みずほ銀行（中国）大連支店 雅瑪多国際物流有限公司 大連分公司 午後：大連泰和信息技術有限公司、大連晴康国際貿易有限公司、米克羅彈簧（大連）有限公司、嘉時泰国際物流（大連）有限公司	留学・インターンシップ予定（11 名）の各企業での担当者との面接 オムニバス講義「中国の仕事と生活」講師依頼
9 月 2 日（火）	午前：東芝大連有限公司 午後：在瀋陽日本国総領事館領事事務所、中国の仕事と生活 第一回目講義受講（講師：平川在大連領事事務所長）受講、大連漫歩広告有限公司、大連中国国際旅行社有限公司、日本法円坂律師事務所 大連代表処、北京大成（大連）律師事務所	留学・インターンシップ予定（11 名）の各企業での担当者との面接 オムニバス講義「中国の仕事と生活」講師依頼 オムニバス講義「中国の仕事と生活」を学生たちと一緒に受講
9 月 3 日（水）	中国戦勝 70 周年記念行事の為 9/3～9/5 は祝日	祝日の期間（特に初日は行動を慎むようにとの連絡があり、教職員は宿舎で、学生は寮にて待機）
9 月 4 日（木）	移動（九門）大連着 終日：グローバルキャリアプログラム（旅順地域等視察・歴史講義）	大連外国語大学旅順キャンパス地域の視察及び担当教員からの歴史講義実施
9 月 5 日（金）	午前：オリエンテーション「留学・インターンシップの心構え」実施 午後：アジア夢カレッジキャリア開発研修	留学・インターンシップに対する心構えの講義「アジア夢カレッジキャリア開発研修」（第 1 回目） 「キャリアとは何か？」等の講義、中国人ルームメイトと意見交換・相違等の認識、目標設定
9 月 6 日（土）	午前：大連愛光浸漬成型有限公司、大連三島食品有限公司、錦州新区経済技術開発区招商中心招商一局一部 午後：大連松下汽車電子系統有限公司	留学・インターンシップ予定（11 名）の各企業での担当者との面接 オムニバス講義「中国の仕事と生活」講師依頼

### ●総括

①中国戦勝 70 周年記念行事の為 9/3～9/5 が祝日に設定されてしまい、学生の安全確保という観点から心配もあったが、大連という中国の中では大

変親日的な都市であった為、大きな騒動もなかった。祝日 2 日目には、旅順という都市部において歴史的な地域、建造物等を視察しても、平常どお



り何もなく安全に過ごすことができた。学生たちが長期間過ごす都市として、大連の素晴らしさを再確認した。

②本プログラム開始時（2005年）から継続しているオムニバス講義「中国の仕事と生活」の授業

を初めて受講することができた。講師の学生を姿は、大変情熱的で授業中の私語は全く無く、真剣にメモを取り、質問する日中学生の姿勢は素晴らしかった。授業の内容も、高度な事項もあり、学生たちの事前準備が推測できた。

## キャリア研修等

- 訪問先国……中国・大連
- 出張期間……平成27年11月28日～11月30日
- 出張者……国際関係学部特任教授 九門 崇、国際交流課参事補 寺尾浩一
- 主な目的……アジア夢カレッジ11期生（11名）に対し、大連外国語大学にてキャリア開発研修を実施する為

### ●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
11月29日（日）	午前：アジア夢カレッジキャリア開発研修準備 午後：アジア夢カレッジキャリア開発研修実施	中国人学生との合同キャリア研修第二回目の実施 （将来の方向性を見出すためのアカデミックな手法を紹介し、各人が実際に検証してみる。また、その結果を発表し合い、情報共有する。）
11月30日（月）	午前：JETRO 大連事務所	人事異動等に伴い関係者に挨拶

### ●総括

「アジア夢カレッジキャリア開発研修」の第2回目は、中国人学生のキャリアに対する意識が少しずつ変化しているのに気づいた。将来は親に進められた進路（就職先）を決めると考えていたのが、本研修及び日本人学生との共同生活のために、今までと違う進路を考え始めている学生がいた。ま

た、そのような中国人学生と意見交換をすることで、「今までの中国の若い人たちの考え方」を学び、座学では学ぶことのできないことを、日本人学生が学ぶことによって、「中国と日本の架け橋的人材の育成（本プログラムの目標）」が可能となるのだと思った。

## 調査指導など

- 訪問先国……中国・大連
- 出張期間……平成26年11月16日～11月20日
- 出張者……国際関係学部准教授 三橋秀彦
- 主な目的……AUCP 期間中の中国語・現地調査指導、AUCP 終了後の3年次の学習計画指導

### ●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
11月16日（月）	午後：大連外国語大学	学生面談
11月17日（火）	終日：大連外国語大学	学生面談
11月18日（水）	午前：大連外国語大学 午後：大連理工大学	学生面談 学生に対する調査指導依頼（本学非常勤講師 石田氏「社会調査概論」担当）
11月19日（木）	終日：大連外国語大学	学生面談

### ●総括

今回の出張の主たる目的は、2005年以来、毎年11月に実施してきた留学期間のちょうど半ばを迎えた学生に対する指導である。以下の3つの内容の個別面談を、1回30分を単位に必要に応じて2回から4回実施した。

（1）中国語に関する相談、指導：現地での最後のHSK受験を控え、学習状況に関するヒアリングを行った。ヒアリングからは中国語に関する相談は特になく、逆に英語学習に関する相談が多

く出された。中国語学習については結果的に今期も1名を除き全員HSK5級の合格基準に到達するなど、HSK受験を想定し徹底した指導が行われている大連外国語大学の教育の成果が証明された。

（2）現地調査に関する指導：本来のスケジュールではこの時期アンケート票を完成し、既に調査を開始していなければならない。例年通り、今年も学生の多くはアンケート票を完成させて

おらず、今回の滞在期間中の半分は、その指導に費やした。

(3) 帰国後の学習計画に関する指導：学生の大多数がこの時期、帰国後の学習計画を持っていないのが現状である。今回の出張では学生に、以下の3つの選択肢（①AUEP、②多文化インターン

シップ（国際関係学部生限定）、③自主計画）を提示し指導を行った。相談の結果、3名がAUEP受験（うち1名は後日辞退）、3名が多文化インターンシップへの参加を表明するなど、半数以上の学生に具体的計画を意識させる等、一定の指導を行うことが出来た。

## インターンシップ 受入企業との協議

- 訪問先国……中国・大連
- 出張期間……平成 27 年 12 月 7 日～12 月 12 日
- 出張者……アジア研究所教授 西澤正樹、  
国際交流課参事補 寺尾浩一
- 主な目的……在大連 AUCP 協賛企業（インターンシップ受入企業との詳細打ち合わせ）及び大連外大とのプログラム内容の打ち合わせの為

### ●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
12月7日（月）	午後：日本法円坂法律事務所 大連代表処、北京大成（大連） 法律事務所、大連漫步广告有限公司	留学・インターンシップ予定（11名）の各企業での担当者との危機管理、評価方、その他詳細事務事項の打合せ。 オムニバス講義「中国の仕事と生活」講師に関する意見交換
12月8日（火）	午前：スイッシュホテル、在瀋陽日本国総領事館在大連出張駐在官事務所、松下汽車電子系統（中国）公司 午後：大連中国国際旅行社有限公司、徳勤華永会計事務所 所有限公司 大連分所、大連外国語大学漢学院	留学・インターンシップ予定（11名）の各企業での担当者との危機管理、評価方、その他詳細事務事項の打合せ。 オムニバス講義「中国の仕事と生活」講師に関する意見交換 インターンシップに関するオリエンテーション（企業側からの期待感、心構え、マナー等）
12月9日（水）	午前：大連愛光浸漬成型有限公司、大連三島食品有限公司、大連市経済技術開発区招商中心招商一局一部 午後：東芝大連有限公司、富士電機大連有限公司、米克羅彈簧(大連)有限公司	留学・インターンシップ予定（11名）の各企業での担当者との危機管理、評価方、その他詳細事務事項の打合せ。 オムニバス講義「中国の仕事と生活」講師に関する意見交換
12月10日（木）	午前：大連外国語大学との打合せ 午後：日本法円坂法律事務所 大連代表処	大連外国語大学との留学プログラム全般に関する意見交換 留学・インターンシップ予定（11名）の各企業での担当者との危機管理、評価方、その他詳細事務事項の打合せ。 オムニバス講義「中国の仕事と生活」講師に関する意見交換
12月11日（金）	午前：全日本空輸株式会社 瀋陽・大連支店	オムニバス講義「中国の仕事と生活」講師に関する意見交換

### ●総括

①インターンシップ開始前に、本学学生に対し、インターンシップに関するオリエンテーション（企業側からの期待感、心構え、マナー等）を開催できたことは大変有意義であった。8月末に留学が始まって以来、座学中心で語学習得を中心に過ごしてきた学生たちが、企業の方々のもとでインターンシップをすることの意義等を伝えたと

きに、学生たちは自らの態度を変更しなければならないと気付いたからだ。この気づきが無いと、各インターンシップ先で習得できることは少ないと思う。学生たちには今後も機会あるごとに、このような気づきを与えることこそが、大切だと思った。

②インターンシップ期間終了後に、各企業担当者に受け入れ学生を、グローバル・ビジネスリテラシーアセスメントシートにて、評価を頂いているが、企業から興味をもたれるケースが増えてきた。特にこれをもとに帰国後のキャリア開発研修を行っているところに、興味が集中している。多くの

の企業では目標管理、人事考課などの制度を導入し、その後の人材育成にそのデータを利用している為だと思う。学生たちが、インターンシップの機会に、評価制度等を理解しておくことは、就職活動の際も有効活用できると思う。

## 修了式、企業訪問等

- 訪問先国……中国・大連
- 出張期間……平成 28 年 1 月 13 日～1 月 27 日
- 出張者……栗田充治学長、  
アジア研究所教授 西澤正樹、  
アジア研究所教授 奥田 聡、  
国際関係学部特任教授 九門 崇、  
国際交流センター部長 宇田川裕、  
国際交流課長 西川修治、  
国際交流課参事補 寺尾浩一、  
国際交流課書記 奈良田和哉
- 主な目的……アジア夢カレッジ 11 期生修了式、  
キャリア開発研修実施、及び受入企業からの意見聴取の為の出張について

### ●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
1 月 13 日（水）	午後：ニューワールドホテル・他業者	修了式会場視察、機材チェック、レイアウト等詳細打合せ
1 月 14 日（木）	午前：スイッシュホテル、ビジネスホテル「漢庭」 午後：大連外国語大学漢学院	日中学生キャリア開発研修会場視察、機材チェック、レイアウト等詳細打合せ 在市内学生用宿舎
1 月 15 日（金）	午前：学長他 3 名、大連着 午後：学長一行大連空港出迎え ニューワールドホテル	インターンシップ最終日 修了式会場視察、機材チェック、レイアウト等詳細打合せ
1 月 16 日（土）	午前：在大連開発区企業ービジネスホテル「漢庭」、教員 2 名大連着 午後：スイッシュホテル、ニューワールドホテル	在開発区企業寮から市内宿舎への引越し支援  日中学生キャリア開発研修実施、帰国後の履修指導に関する説明会実施、アジア夢カレッジ修了式開催
1 月 17 日（日）	学長一行移動 大連・成田	学長他 2 名帰国
1 月 18 日（月）	午前：職員 1 名大連着 全日本空輸株式会社 瀋陽・大連支店、日本貿易振興機構大連事務所、みずほ銀行(中国) 大連支店 午後：大連泰和信息技術有限公司、大連晴康国際貿易有限公司	アジア夢カレッジ 11 期生のインターンシップ先企業を訪問 オムニバス講義「中国の仕事と生活」に関する意見聴取 来年度の留学候補学生等の情報伝達
1 月 19 日（火）	午前：大連愛光浸漬成型有限公司、錦州新区経済技術開発区招商中心招商一局一部 午後：嘉時泰国際物流（大連）有限公司、大連松下汽車電子系統有限公司、米克羅彈簧(大連)有限公司	同上
1 月 20 日（水）	午前：雅瑪多國際物流有限公司 大連分公司、大連漫歩廣告	同上

	有限公司 午後：大連中国国際旅行社有限公司、在瀋陽日本国総領事館在大連領事事務所	
1月21日(木)	午前：東芝大連有限公司、大連三島食品有限公司、富士電機大連有限公司	同上
1月22日(金)	午前：日本法円坂律師事務所大連代表処、徳勤華永會計師事務所有限公司 大連分所、駐大連北九州市經濟事務所	同上
1月23日(土)	午後：教員1名帰国 午後：謝恩会開催ホテルと事務打合せ	
1月24日(日)	大連外国語大学漢学院	担当者との意見交換
1月25日(月)	大連外国語大学漢学院	午前：本学学生との帰国時の注意事項等説明会開催 午後：大連外国語学院国際交流処長との打合せ
1月26日(火)	午前：在瀋陽日本国総領事館在大連領事事務所	本年度の本プログラムが終了報告、来年度の本学スケジュールの情報伝達
1月27日(水)	大連空港	学生と合流、空港での出発手続きサポート

#### ●総括

①インターンシップ開始前に、本学学生に対し、インターンシップに関するオリエンテーション（企業側からの期待感、心構え、マナー等）を開催できたことは大変有意義であった。8月末に留学が始まって以来、座学中心で語学習得を中心に過ごしてきた学生たちが、企業の方々のもとのインターンシップをすることの意義等を伝えたときに、学生たちは自らの態度を変更しなければならないと気付いたからだ。この気づきが無いと、各インターンシップ先で習得できることは少ないと思う。学生たちには今後も機会あるごとに、このような気づきを与えることこそが、大切だと思った。

②インターンシップ期間終了後に、各企業担当者に受け入れ学生を、グローバル・ビジネスリテラシーアセスメントシートにて、評価を頂いているが、企業から興味をもたれるケースが増えてきた。特にこれをもとに帰国後のキャリア開発研修を行っているところに、興味が集中している。多くの企業では目標管理、人事考課などの制度を導入し、その後の人材育成にそのデータを利用している為だと思う。学生たちが、インターンシップの機会に、評価制度等を理解しておくことは、就職活動の際にも有効活用できると思う。

## NAFSA年次大会出展

ボストン・ロサンゼルス  
(5月)

- 訪問先国……アメリカ  
ボストン・ロサンゼルス
- 出張期間……平成27年5月24日～6月4日
- 出張者……国際関係学部講師 太田瑞希子  
国際交流課長 西川修治  
国際交流課参事補 寺尾浩一  
国際交流課主事補 ノボタニ・ケイシー
- 主な目的……グローバル人材事業の一環として、世界最大の国際教育交流フェアである NAFSA 年次大会で本学紹介ブースを出展し、本学の教育内容を広く周知するとともに、現協定校の関係強化と新たな協定校の開拓につなげる。また、年次大会終了後、主にコミュニティ・カレッジを中心に訪問調査し、将来のプログラム展開を見据えて関係者と協議を行った。

### ●行動日程 (現地)

日時	訪問先・対応者等	概要
5月24日(日)	午後：ボストン着	スケジュール等に関する打合せ
5月25日(月)	正午：NAFSA参加登録、ブース設置作業 午後：Study in Japan ブース現地オリエンテーション	JAFSA、JASSO 事務局、確認ポイント等に関する打ち合わせ
5月26日(火)	終日：Expo Hallにてブース展示及び他ブース訪問 午前：ASU (アリゾナ州立大学)との会合 Director of Student Services、Program Coordinator, Group and Custom Programs 午後：SDSU (サンディエゴ州立大学)との会合 ALI Recruiting Director  Univ. of Manitoba との会合 Business Development Coordinator (International)  Study Abroad Foundation(SAF)主催レセプション 場所：John Adams Courthouse Great Hall	亜細亜大学の紹介及びネットワーキング  新コース (Global Launch)、協定書、保険契約等に関する協議  プログラム進捗状況、受け入れ可能人数の確認  新しく立ち上げる短期留学プログラムの実施について協議  SAF 関係大学関係者とのネットワーキング、Univ. Penn など
5月27日(水)	終日：Expo Hallにてブース展示及び他ブース訪問 午前：Member Interest Group Meeting: Community College  Study in Japan ランチオン 場所：Westin Waterfront	亜細亜大学の紹介及びネットワーキング  国際交流の発展に向けた CC 関係者協議に参加 財政的な支援の必要性など  協定校を招待しての意見交換会とネットワーキング

	<p>Marina Ballroom 午後：Edmond Comm. Collge (WA) との会合、Resident Director</p> <p>College of Lake Country(IL) とのの会合、Manager, Center for International Education</p>	<p>今後のプログラム展開についての協議</p> <p>新規協定及び学生交換の可能性に関する協議 MOU 署名</p>
5月28日(木)	<p>終日：Expo Hall にてブース展示及び他ブース訪問 午前：セッション参加：Top Global University Initiative Florida International University、Associate Director International Recruitment</p> <p>WWU との会合、Student Services Assistant, AUAP</p> <p>Hansung Univ.との会合、Manager, International Programs</p> <p>Univ. of Penn との会合</p> <p>午後：Orange County Community College</p> <p>SAF との会合</p>	<p>亜細亜大学の紹介及びネットワークキング</p> <p>新規協定及び学生交換の可能性に関する協議 (インターンシップ、交換留学など)</p> <p>学生の生活状況の改善点などについて協議</p> <p>新規協定と主に相手大学で実施している Summer Program 参加の可能性に関する協議 (現在、北海道の大学と交流のみ)</p> <p>新規協定及び学生交換の可能性に関する協議 (SAF との連携が可能)</p> <p>新規協定及び英語研修プログラム実施の可能性についての協議、訪問調査に関する確認</p> <p>協定締結についての準備協議を行った 2015年度中に締結することで大筋合意</p>
5月29日(金)	<p>終日：Expo Hall にてブース展示及び他ブース訪問</p> <p>午前：Whatcom Community College との会合</p> <p>午後：Western Sydney 大学 ブース来訪 撤収作業</p>	<p>亜細亜大学の紹介及びネットワークキング</p> <p>今後のプログラム展開についての協議 2015年度中に大学間協定を締結すること、10月に本学で説明会を実施する旨合意 その他単位互換について確認する</p> <p>両校の紹介</p>
5月30日(土)	<p>移動 太田帰国 職員 ポストン -ロサンゼルス</p>	
5月31日(日)	<p>ロサンゼルス</p>	<p>市内治安状況、交通手段とアクセス、生活環境等調査</p>
6月1日(月)	<p>午前：Lighthouse 訪問、対応者 Director、Producer、Producer</p> <p>午後：Col Poly Pomona 訪問 対応者 Director, English Language Institute、Director Global Education Programs</p>	<p>本学学生が参加している教育セミナーに関して 情報交換、今後の連携を確認</p> <p>授業、図書館、学生会館、食堂、宿舍などの環境調査 本学の意向を伝えつつ、プログラムの実施可能性について協議</p>
6月2日(火)	<p>午前：El Camino Community</p>	<p>(各大学において)</p>

	College 訪問、対応者 <b>Manager</b>  Irvine Valley College 訪問 対応者 Director  午後：Orange Coast College 対応者 Director International Center Vice President of Instruction	授業、図書館、学生会館、食堂、宿舍などの環境調査 本学の意向を伝えつつ、プログラムの実施可能性について協議
--	--	--

●総括

グローバル人材育成推進事業を開始して、NAFSA でのブース出展 2 回目となった。初回は要領が得られていなかったため、効率的に協定校との会合や新たな大学とのミーティングが組むことが困難だったが、今回は円滑に準備し様々な大学の現在と今後のプログラム運営について協議することができた。

昨今、経済的な理由で留学を断念している学生が多く見受けられることを受け、特にアメリカの Community College に焦点を絞り、新たな協定締結、そして学生派遣の可能性を探った。事前にインターネットで参加校にアクセスに、アポイントをとってのカンファレンスに出発した。また、NAFSA では、多くのセミナーも開催されており、その中に Community College が一同に介したのがあり、そこでネットワーキング行うことでさらに教育的な特徴に関する情報を得ることができた。

また、現在プログラムを実施している協定校とは、改善すべき点などについて詳細協議を行うことができ、今後より効果的な教育に発展させる道筋を立てた。

最後に、NAFSA 終了後、カリフォルニア州に移動、4 年制大学で 1 校、2 年制大学 (Community College) で 4 校を訪問、キーパーソンとプログラム開発に関する協議ができたことも大きな成果だった。日本で考えられている 2 年制大学のイメージよりはるかに充実した教育課程とキャンパス環境に驚愕し、帰国後には関係教職員と情報共有し実現可能性を検討した。

特に Whatcom Community College とは実際に学術文化交流協定を締結することができ、また認定留学に近い形だが、学生も派遣することが決まった。

## 職員海外研修

### フィリピン(3月)

- 訪問先国……フィリピン
- 出張期間……平成 27 年 9 月 6 日～9 月 11 日
- 出張者……留学生支援課長 三澤 勝
- 主な目的……事務職員を海外へ派遣することにより、職員の外国語能力を高めるとともに研修先で得た経験を今後の業務遂行に活かすため

●行動日程 (現地)

日時	訪問先・対応者等	概要
9 月 6 日 (日)	移動 東京-マニラ	到着後、宿泊先及び研修先周辺を視察
9 月 7 日 (月)	セルク・マニラ校	オリエンテーション受講 Listening, Reading, Writing, Speaking, Grammar, Business Class 等を受講
9 月 8 日 (火)	セルク・マニラ校	Listening, Reading, Writing, Speaking, Grammar, Business Class 等を受講
9 月 9 日 (水)	セルク・マニラ校	同上
9 月 10 日 (木)	セルク・マニラ校	Listening, Reading, Writing, Speaking, Grammar, Business Class 等を受講 『特定非営利活動法人ソルト・パヤタス』スタッフによる講演を受講
9 月 11 日 (金)	セルク・マニラ校 宿舎	セルク・マニラ校受講生用宿舎視察

## ●総括

職員海外研修に参加して、聴解、読解、会話、文法等、英語基礎力を強化すると共に、応用力やビジネス会話力を向上させることができた。研修先のセルク・マニラ校では、1日8時間のワン・トゥ・ワン・レッスンに加え、グループワークや土曜クラスのオプションも用意されており、ビジネス街に位置するため通いやすく、レッスンも個別ブースで集中して学習に取り組める環境となっている。語学研修の目的や個々の語学レベルにあわせて、フレキシブルに留学期間を設定できることと、日本の1/4以下のレッスン料が魅力的である。語学力向上のみならず、ビジネス経験のある講師とのフリートークや交流を通して、フィリピンの生活、文化、教育等の現地事情を学ぶこともできた。

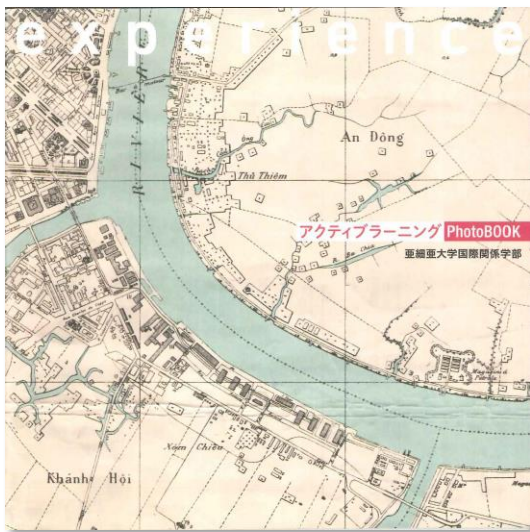
研修期間の終盤に、フィリピンの貧困地区で子どもと女性を中心に教育と収入向上支援事業を行っている『特定非営利活動法人ソルト・パヤタス』のスタッフによる講演を受講。団体概要や主な活動内容等の紹介があり、フィリピンにおける経済格差や貧困問題の現状及び支援事業の詳細について、理解を深めることができた。将来的な学生の語学研修実施を想定し、帰国日にはセルク・マニラ校の受講生用宿舎を訪れ、部屋数等施設内容、宿泊料金、セキュリティなど管理体制等を確認した。セルク・マニラ校では、インターネットによるオンラインレッスンも行っていることから、現地での語学研修に加え、図書館に特設ブースを設置し、オンラインレッスンを提供することも考えられる



修了証書



亜細亜大学〈行動力あるアジアグローバル人材〉育成事業 関連資料



海外インターンシップ・海外フィールドスタディー参加促進案内冊子



海外案内冊子



東日本第2ブロックイベント報告書